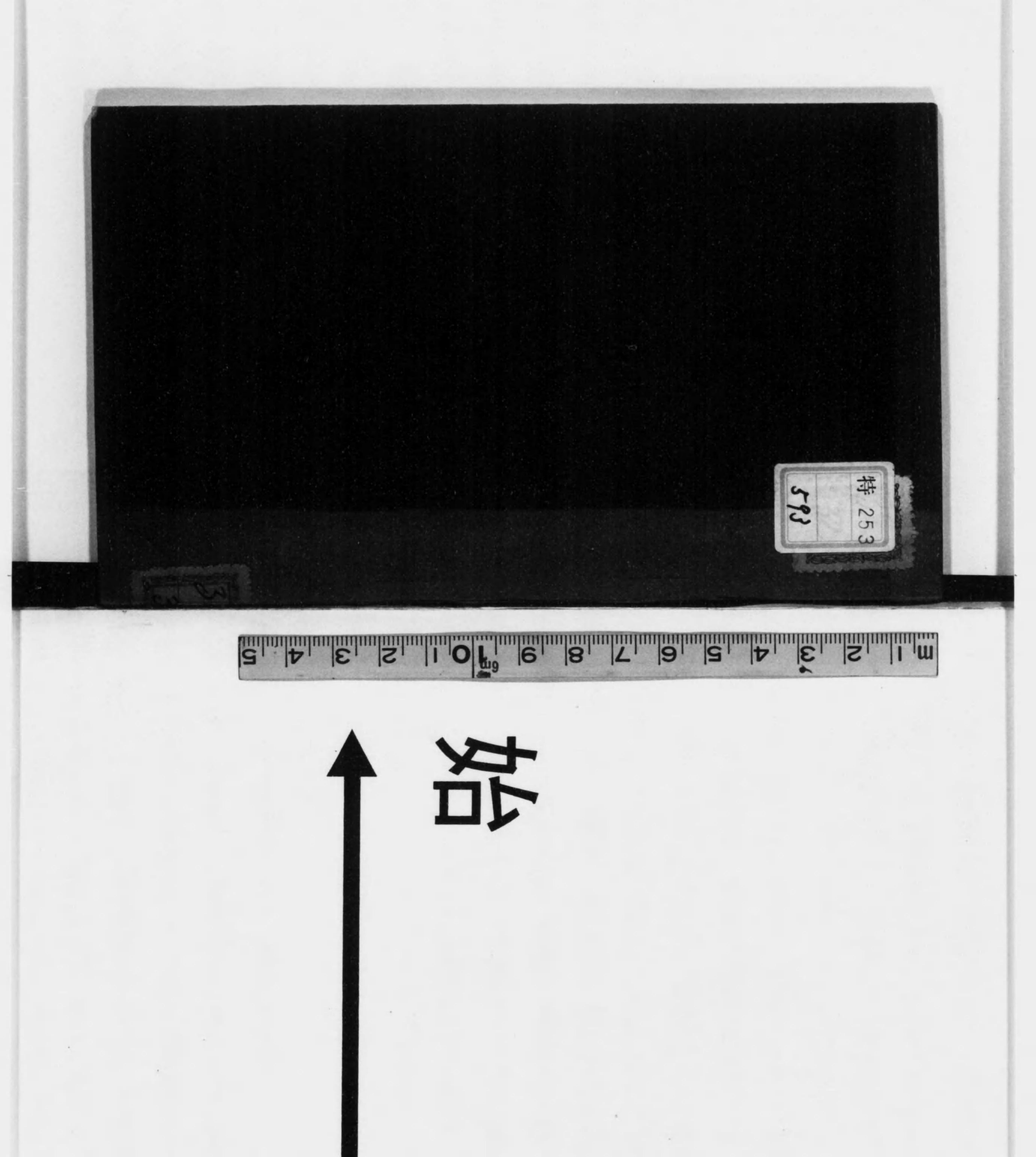

特 253
583
40

聖戒閑話

特
593

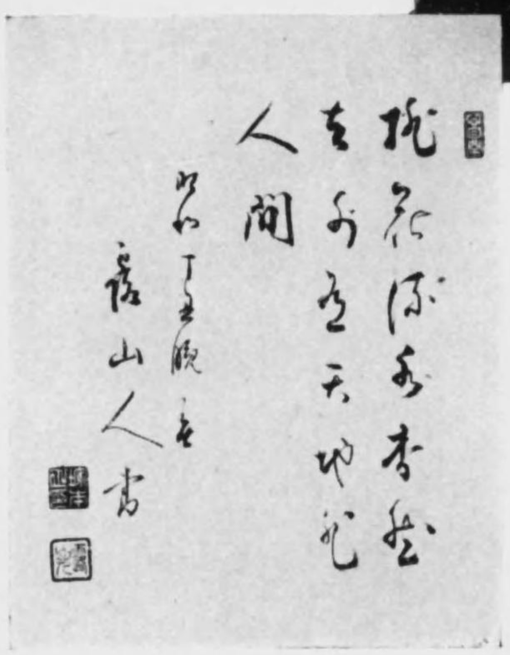
特253
593

聖戰閑話

塚本哲三 著

東京
株式會社 有朋堂發行

昭和十三年 帝國圖書館



著者の近影と其筆蹟

緒　言

私は講習會の席上や『日刊受驗研究』の紙上で屢々「受驗閑話」をやる。今度『更訂國文解釋法』が成つたのを機會に、それを整理して見たのがこの一小冊子である。

固より凡常の御談義である。然し心から聖戰闘士を思ひ、正しく聖戰闘士を指導しようとする赤誠に至つては、敢て之を天下に公言して憚らぬつもりである。

この一小冊子の記述が今日までに話したり書いたりした以上に一歩も出てゐないかも知れぬ。然し今現在の私の最善を盡して新規に書き下したものであるから、少くも現在の私としては、これが聖戰闘士に向つて物語らんとする最善の忠言であり、又その總てでもある。

卷末に「自分を語」つた事は、どうやら自己宣傳じみて心苦しくないでもない。然しこんな機會に自ら五十七年の半生を追憶しても見たかつたし、又「語る私」がどんな過去を持つてゐる人間であるかを諸君に知つて戴きたいとも思つたからである。

片々たるこの一小冊子が、たとひ僅かでも諸君の聖戰準備を正しく指導し、諸君の受驗生活に潤ひを與へる資料となる事が出來れば、眞に欣幸の至りである。

塚本哲三

目次

聖戰の意義……（五—一三）
意義深い戰……五
ピラミッド型……六
入試よ教育的に最も嚴肅であれ……六
偶然と必然……八
目的と結果……一〇
勝敗は戰の常……一一
さへすれば……一二
でも・なら・こそ……一三
矛盾の眞理……（一四—二八）
矛盾の語義……一四
膽大心小……一六
積極と消極……一七
待望と直面……一八
腐ると伸びると……一九
遠心と求心……二〇
協同と孤獨……二一
自己を信ぜよ……二二
自尊と自遜……二三
最善と進歩……二四
凡中に非凡を見よ……二七
準備の態度……（二九—四七）
選手教育……二九
正しい態度……三〇
シーソーの戒……三一
科としての學習……三二
根柢の勉強……三四
チームの統制……三五
デパート式學習法……三六
平行式と集團式……三七
一年を三期に分けて……三八
試驗練習……三九
採點の嚴正……四一
褒の河原……四二
他山の石……四三
レディーメード……四四

目次

異說に對する態度……四五
自己を中心として……四六
戰前の心の落着……四七
實戰の用意……（四八—五六）
總點の勝敗……四八
最後まで一心に……四九
問題の要求……五〇
きれいで見易い答案……五一
中らずと雖も遠からず……五二
新しく考へよ……五三
より多くの力を易に注げ……五四
白紙のアタマ……五五
神經質にならぬ攝生……五五
國文について……（五七—六五）
國文解釋の一義的態度……五七
國文考究上の諸方面……五九
精讀と達讀……六四
漢文について……（六六—七六）
漢文學習の意義……六六
解釋と訓讀……六七
構文考察上の八則……六八
作文について……（七七—九二）
作文の根本義……七七
科としての作文……七九
題に合ふ事……八〇
作文問題の大別……八一
表現の正確……八二
文の纏りと長さと時間……八四
作文の練習……八八
作文に使ふ假名……九〇
藝術的とは何か……九〇
自分を語る……（九三—一〇〇）
生ひ立ち……九三
小學生時代……九三
中學生時代……九四
小學教員時代……九五
中學教員時代……九六
其の後の私……九八
私の念願……九九

聖戰閑話

塚本哲三

聖戰の意義

意義深い戰

所詮人生は戰だ。國のために戰ひ、道のために戰ひ、技のために戰ひ、名のために戰ひ、利のために戰ふ。そして戰ひ勝つてなるべく少數の强い仲間にはひる事——更に煎じ詰めていへば、一番强い最後の一人として殘る事が、凡ての戰に於ける意義であり念願であらう。諸君の聖戰——入試難關突破の戰はその最も聖なるもの、意義深きものゝ一つである。學に忠なる若人が、更に進んで高等の教育を受けんがために、學そのものを武器として、二十人に一人、十人に一人、五人に一人の勝者たるべく、正々堂々と頭腦の戰を戰ふ戰だからである。

ピラミッド型

聖戰の由つて來る原因はピラミッド型の教育制度である。小學教育は所謂義務教育であり國民教育であつて、凡そ學齢に達した兒童の一切を收容すべく設備されてゐる。だから原則としてそこには入試の競爭は無い。ところが中等學校となると遙かにその設備が縮小されてゐて、志望する者の一切を收容しきれない。殊に官公立の中等學校に於て然りであつて、そこに早くも激甚な聖戰が展開される。準備教育の弊がどんなに强調されても、入試の方策がどんなに研究討議されても、結局入れ得る人數が入りたい人の數より遙かに少い間は、そこに何等かの形に於て「入るための激しい戰」が展開される事は、どうする事も出來ない事實である。高等專門の學校に至つては、歩一歩ピラミッドの頂點に近づいて行くがために、「入るための競爭」は益々激甚を加へる。そこに聖戰の雄々しくも又涙ぐましい繪卷が繰り展げられるのである。

入試よ教育的に最も嚴肅であれ

入試の激しい競爭がどうする事も出來ない當面の事實である以上、その方策が、その問題が、教育的に最も嚴肅なものであるべきは、敢て呶々するを須ゐざる自明の理であらう。中等學校の

入試が、その方策に於て、その試問に於て、端的に小學教育の向上進展充實を意味し、高等專門諸學校の入試問題が、亦端的に中等教育の向上進展充實を意味するものである時、入試の競爭が激しければ激しい程、國家教育は益々向上進展充實する筈である。

入試の弊害がいくら强調され、入試徹廢の聲がいくら高く叫ばれても、人皆「自己によよき」を望み、勝者たるの誇を享樂しようとする人間本然の欲望を持つてゐる限り、そしてピラミッド型の教育制度が根本的に覆し去られぬ限り、入試の競爭は遂に避くべからざる事實である。とすれば、今の國民に課せられた最も大きな問題の一つは、「如何にして入試を教育的に最も嚴肅ならしむべきか」であらねばならぬ。

斯ういふ見地から現下入試の實際を檢討する時、小學校から中等學校へに於ても、中等學校から高等專門諸學校へに於ても、當然改善せらるべき幾多の缺陷が見出される。特に高等專門諸學校の入試問題には、かなり非教育的なものすら見出されて、往々にしてそれが社會論議の的となり、當局警告の資料とさへなつてゐる。然し今私はそれについて具體的に云々しようとする意志はない。私は聖戰がもつと〳〵本的質に考慮され論議研究されて、その存在が直ちに國家教育の向上進展に力强い役割を演ずる日の來らん事を切望し、又その當然來るべき日を期待して、その切望と期待との上に立つて、敢て聖戰闘士への忠言を進めて行きたいと思ふ。

偶然と必然

「勝つも負けるも時の運」といふ事は確に一面の眞理である。出來てもはひれぬ人があるかと思へば、一方には出來なくてもはひれる人がある。例へば、散々なまけ通して何の勉強もしないでゐた者が、いざ試驗に出掛けようといふ前夜、それでもさすがに氣掛りで盲目滅法に參考書を開いて見て、出たとこ勝負にそこをすつかり暗記した。と、それがそつくり翌日の試驗に出てまんまと十人に一人の榮冠を贏ち得た。――などいふ僥倖兒も多くの中に一人や二人はゐよう。

働いても働いても年中不仕合で貧乏ばかりしてゐる。捨鉢になつて、有金殘らず飲んで了つて、フラ〳〵と往來を歩いてゐると、何かが足許に引掛つた。拾つて見たら勸業債券。交番に屆けたが落主は出ない。で、一年目に下渡しになつた。と、その日の新聞に抽籤番號が出てゐてまんまと一千圓。それを元手に相場をやつて忽ち大成金。――そんな運命のいたづらもないとは限らぬ。

だが、偶然はどこ迄も偶然である。出來ないから、なまけてゐたから、はひれたでもなければ、出來たから、勉強したから、落ちたでもない。偶然の結果に目がくらんで必然の努力を怠る者は、株を守るの愚として千古に嗤を遺してゐる。昔支那の宋に一人の農夫があつた。畑を耕してゐる所へ一匹の兎が飛び出して來て、木の株で頸を打つて死んだ。その農夫が玉の汗を搾つて働く一

日の勞銀は、一匹の兎の値より遙かに少いものである。そこで彼は眞面目に働く事の愚かさを自ら嘲つて、忽ち手にした耒を捨てゝその株を守つてゐた。が、兎は二度と再び飛び出して來ず、その身は宋國の笑草になつた、といふのである。

必然の努力は人間自らの爲す所であり、事の結果は他から廻つて來るものである。因果應報は宇宙の大原則で、善果に善報があり、惡果に惡報のあるのは、絶對に動かす事の出來ぬ鐵則である。然しそれは悠久な宇宙の間に極めて遠大に廻轉してゐる理法であつて、人間の小さいアタマで速斷するやうに簡單に廻つて來るものではない。從つてそこに上述するやうな偶然が往々にして人生に起つて來るのである。

「禍福は糾へる縄の如し」といふ。試みに禍を赤、福を白としてその二筋の絲を綯ひ合はせよ。白の裏面は赤、赤の裏面は白である。縄の紅白はどんなにでも規則正しく綯ひ合せる事が出來る。けれども人生の禍福の縄は人間の力ではどうする事も出來ない。一生涯白の面にのみ面し得た人は幸運の人である。一生涯赤の面にのみ面せしめられた人は不運の人である。只吾々に許された事は、白に面して心驕らず、赤に面して悲觀せず、常に人間として然かあるべき正しい努力を持續して行く所の、必然の精進あるのみである。

運命は絶對である。何事も運だ、なるやうにしかならぬと諦めるのも運命だし、運などいふ事

はない、何でもなるやうになる、人間の力で出來ぬ事があるものかとガンバるのも運命である。要するに人は凡てその通りに運命づけられてゐるのだ。――斯う考へる時、結局運命は絶對だといふ外ないであらう。高遠な哲理は姑く別として、之を吾々生活の實際からいへば、絶對なものはいくら考へて見てもどうにもならぬ。だから吾々は、運命だの宿命だの、そんな事は全然考の外に置いて、どこ迄も自己の志す所に向つて、必然の努力、十全の努勉を續けて行けば、それでよいのだ。

目的と結果

はひるために勉強するといふ事と、勉強した結果はひつたといふ事とは、似て甚だ非なるものである。諸君は聖戰を「はひるための戰」といふ。それに聊かも間違ひはない。けれども、はひるための戰だから「はひるために勉強する」といふ時、そこに由々しい間違が起る。はひるための勉強は、はひれぬ結果を將來した時、殆ど全く無意味に終る惧があるからである。二十人に一人の競爭では、はひれる者は一人ではひれぬ者は十九人である。十人に一人なら殘る九人、五人に一人なら殘る四人、その人々の勉強が結果に於て全然無意味であるとしたら、聖戰の勉強位天下の青年を毒するものはあるまい。勿論誰しもが、殘る十九人、九人、四人になるつもりは絶對

に無い。つもりは無くても事實その組に編入せられる人の存するのが入試の實際である。だから假にもさうした危惧を孕んだ勉強から諸君は即時に解放されねばならぬのである。

目的ではない目標である。入試突破を目標として、意義深い聖戰の準備のために眞に正しい勉強の努力を續ける時、一切の學習はほんとに諸君の血となり肉となるであらう。國漢を、英語を、數學を、ほんとに自分の血とし肉として堂々と學問の戰を戰ふ。聖戰の意義は只これあるのみである。斯くしてはひれた者は當然の幸運兒であり、はひれなかつた者は數の支配を餘儀なくされた不運兒である。而もその準備過程に於て、自分の肉とし血とした學問は、その何れの場合に於ても、一生を豐かならしめる所の頭腦的榮養である。そこに聖戰の尊さが見出されねばならない。

勝敗は戰の常

戰は言ふ迄もなく勝を豫想する。負けるために戰ふ馬鹿は無い。けれども二人で戰へば一人は勝ち一人は負ける。若し負けたがためにその戰が無意味だといふなら、一切のスポーツ――競爭を意味するスポーツは皆その存在の意味がなくなる。「必ず勝つべき」戰を準備し、「負けて悔なき」戰を戰ふ所に、スポーツの美しい明朗さが存するのである。諸君の聖戰も正にさうである。

豫想は詩だ。美しい詩だ。吾々は常に勝つ日の嬉しさ輝しさを豫想しよう。「若し負けたら」―

—そんな陰慘な豫想には一刻でも捉はれぬがよい。而も詩は遂に詩である。吾々はそれがために森嚴な事實を過つてはならぬ。飽く迄も自己が志す所のゴールをしつかり見つめて、人に先じて正しくそのゴールに飛び込むための努力を續けなくてはならない。斯くしてこそ諸君の聖戰は、勝敗の結果を超越した尊さ、聖戰自體の尊さを持つ事となるのである。

さへすれば

「はひれさへすればよい」——この一語位諸君を過つものはない。それは勿論諸君の腹の底から迸り出る僞らざる告白であらう。吾々はその深刻な叫びに對して涙ぐましい同情を拂ふに吝ではない。けれどもその心持がどの位聖戰自體の尊さを冒瀆するかを思ふ時、泣いてそれを却け去らぬわけには行かない。

「はひれさへすればよい」——それがために學問が凡て二義的になる。非教育的になる。そして「はひれるか、はひれないか」だけが常にアタマの問題になつて、眞に血となり肉となるやうな正しい學問の勉強から見放される。それでも結果に於てはひれた少數の僥倖兒はまだよい。はひれなかつた多數の若人の純眞さが、そのためにどの位傷つけられるかを思ふ時、吾々は戰慄をさへ禁じ得ないのである。

若人よ、「さへすれば」と歎ずるの卑屈さを恥ぢよ。「おれははひるのだ、おれの力で堂々とはひるのだ」——その意氣の下に只一日々々の正しい學習に精進せよ。「これは出るだらうか」「いやこんなものは出なからう」「こんな事をしてゐては損だ」「もつとらくに受かる手があらう」——そんな考を以て焦躁な一日々々を送る事は、斷じて聖戰を價値づける所以ではない。

でも・なら・こそ

「あいつでもはひつた」「これでもよいでせう」——凡そ低級の諦めである。「でも教育」「でも學習」に低迷してゐるがために、屢々受驗準備が非學問的非教育的なるものの代用詞とされるのである。

「あいつならきつとはひれる」「これなら申分はない」——せめてこの階級の人間となり、この種類の勉強をやらねばならぬ。若し夫れ百尺竿頭一歩を進めて、

「それでこそほんとの勉強だ、ほんとの學問だ」といふに至れば、正に理想の境地である。諸君はこの理想の具現を目指して、せめて「これなら」の勉強に精進せよ。「でも」に甘じ「さへ」の歎聲を漏して、二義的な非教育的な勉強に諸君の所謂準備時代を過すべく、聖戰の價値が、否聖戰を體驗しようとする諸君自らの價値が、餘りに尊いものである事を思はなくてはならない。

矛盾の眞理

矛盾の語義

楚人に盾と矛とを賣る者があつた。先づその盾を出して、

「私の盾はとても堅いんで、何物も之を陷れる事は出來ませんよ」

と自慢して置いて、さてすぐ矛を出して、

「私の矛のするどさといつたら、それはもうどんな物でも陷れずには置きませぬテ」

と譽め立てる。そこで或人が、

「ではお前の矛でお前の盾を衝いたらどんなものかナ」

といふと、その男はぐツと詰つて一言も無かつたと韓非子にある。これが矛盾といふ言葉の起源である。

なるほど明かに矛盾だ。然し戰ふ者はさうした矛と盾とを同時に自らの物として持つてゐる所に眞の强さがあるのではないか。必ず敵を陷れる矛と、必ず敵に陷られぬ盾と――それが攻擊と守備との最上である。野球は最もよくその眞理を吾々に示して呉れる。打棒如何に奮ふとも、

守備に缺陷があつては勝味はない。守備如何に堅くとも、打棒の貧弱を以てしては亦優勝は期し難い。

矛盾よく敵を制す

である。諸君の聖戰も正にその通りだ。

勝つて負けない。取つて取られない。食つて食はれないである。諸君は屢々攻める事に急にして守る事を忘れ、守る事に專心して攻める力を養はない。さういふ心の缺陷から「出來てもはひれぬ」といふ不自然な結果が將來されるのである。

徒然草の中には最もよく矛盾の眞理が物語られてゐる。酒の害を强調した筆は忽ち酒の趣を謳歌する筆に轉じてゐる。人と對坐するの煩を叫びながら、直ちに會心の友との長話を歎美してゐる。それと矛盾と感ずる人は未だ眞に矛盾の意義を了しないものである。

昔或大名が家來に向つて「これは火急の用件だ、ゆつくり認めよ」と命じたといふ。「ゆつくり急げ」といふ注意である。火急なるが故に殊更心を落着けて過誤なからしめよといふ事である。あわてて事をやれば疎忽がある。悠々閑々と構へてゐては事の間に合はぬ。如何なる場合にも吾吾はゆつくり急がなくてはならない。

膽大心小

「膽は大なるべく心は小なるべし」――これも矛盾の眞理の一つだ。膽斗の如き當年の相模太郎は、蓋し亦細心の注意を以て外寇來に善處したに違ひない。斯くてこそその膽の大に國光宣揚の威力があつたのである。

「試驗場であがつて了ふ」――それが膽小の端的の現はれである。「うつかり問題を見そこなふ」――それが心大の端的の現はれである。同じく矛盾でもこれはマイナスの方向に向つた矛盾である。

うはべの强さ、口先のさかしさ、それは凡て膽大心小の逆である。瘦犬の吼えるやうな强さである。世の中には何と膽小心大なる瘦犬の徒の多い事よ。諸君は深く自ら省みてその愚かさから救はれなくてはならぬ。

膽大の伴はぬ心小は所詮くよ〳〵として事毎に心を勞する神經質の徒である。心小の伴はぬ膽大は概ね花々しい成功の繪卷を敗殘の血に塗りつぶす英雄の末路である。

どつしりと構へ込んで、びくともせぬ覺悟を臍下丹田にしつかり定めておいて、而も細心翼々所謂薄氷を蹈むの用意を以て事に處する者のみがほんとに最後の勝利を得るのだ。

積極と消極

お經の文句に「諸惡莫作衆善奉行」とある。凡ての努力は、一方に於て積極的に進むと同時に一方に於ては控へてしないといふことが大切である。一方に於ていくら善い事をしても、同時に惡い事をしてゐては結局相殺されて零となるからである。

「爲さざる所あり然して後爲すあるべし」といふ格言もある。同じ事だ。負けぬといふ事實があつて始めて勝つといふ事實が確立する。相撲でよく見る踏切がそれだ。金剛力を奮つて敵に土俵の砂をかませた。正に堂々たる勝である。ところがそれより一瞬の前に自分の足が土俵の外に出てゐた。眞に惜敗である。「相撲に勝つて勝負に負けた」などと推賞された所で、負けた事實はどうする事も出來ない。

諸君等はよくさうした答案を書く。折角うまい事を書いて置きながら、とんでもない間違をやつて、そのうまさから贏ち得た得點をフイにして了ふ。中等學校式の救ひ上げる採點なら、或は出來た方だけに點をつけて、出來ない所はそツとして置くといふ手もあらう。が、激甚な入試の競爭にはそんな甘い手は無い。入試のレフリーは森嚴そのものだ。だから諸君は「取る」努力と同時に「取られぬ」努力をしなければならぬ。衆善奉行と同時に諸惡莫作が必要なのだ。

待望と直面

枕草子に「心たゆまるゝもの。日永きいそぎ」とある。待望には兎角心のたゆみがある「まだ先は永い」といふ心の油斷があり「きつとうまく行く」といふ心の夢がある。美しい詩がある。事に直面すると心のゆとりがなくなる。強い心の緊張を感ずると同時に、ともすれば不安と焦躁とがひし〳〵と胸に迫つて來る。

これはどうする事も出來ない人間自然の眞情であるにしても、苟も戰ひ勝たうとする者は、この自然の人情を克服しなくてはならない。

待望に直面の緊張を加へ、直面に待望のゆるやかさを加へる。こゝに吾々は鮮かに矛盾の眞理を見出すべきである。準備の一年半年は諸君に取つてかなり待ち久しい待望である。その時諸君の心に油斷の空隙が生じて、その空隙から恐ろしい結果が芽生え始める。戰前の一月二月一旬二旬は諸君をして不安焦躁を餘儀なくせしめる所の當面である。そしてその不安焦躁が屢々諸君に悲しむべき結果を將來する。況や聖戰に直面しての不安焦躁をやである。

待望に在つて緊張し、直面して寧ろより多く心のゆとりを持て。これが諸君に輝しい榮冠を齎す所の大きな矛盾の力である。

腐ると伸びると

競技に最も恐るべきは腐る事と伸びる事である。負けて腐り勝つて伸びる。多くの場合それが敗戰の因を爲すのである。この二つはマイナスの方向に於てしつかりと握手してゐる矛盾である。負けて腐る者は勝つて伸び、勝つて伸びる者は負けて腐る。斯ういふ矛盾を持つた闘士こそ眞に憐むべきである。

勝つて誇らず、負けて腐らぬといふ事は實にむづかしい。人情の自然に反するとさへ謂へる。然し苟も戰ひ勝たんとする者は、この正しい矛盾に徹しなくてはならない。

運動家にスランプといふ時期がある。これは腐るといふよりも寧ろ一種の生理的現象かも知れない。それは殆ど週期的なものとさへ謂はれてゐる。多くの運動家はそれに對してどういふ恢復策を講じてゐるか知らぬが、このスランプ狀態は諸君の學習上にもかなり見受けられて、大抵は神經衰弱などいふ名の下に醫家の手に委ねられてゐるやうだ。實際の病氣は固より醫家を煩はすべきであるが、然し私の見る所では、少くも學習上のスランプに關する限り、心の持ち方一つ、即ち出來なくても腐らず、出來ても伸びぬといふ意識的努力に依つて、——寧ろ出來る出來ないから超越した學そのものゝ本質的努力に依つて、十中九分までは救はれるやうである。

遠心と求心

遠く離れようとする力、外へ〳〵と擴らうとする力と、出來るだけ近寄らうとする力、中へ中へと食ひ入らうとする力とは、常に相俟つて正しく働かなくてはならぬ。玆にも矛盾の眞理が鮮かに見出される。

儒教教義の精髄の一つとして、遠心的效驗を期待する者は必ず求心的努力に精進せよといふ教理がある。大學に

古の明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其の國を治む。其の國を治めんと欲する者は、先づ其の家を齊ふ。其の家を齊へんと欲する者は、先づ其の身を修む。其の身を修めんと欲する者は、先づ其の心を正しうす。其の心を正しうせんと欲する者は、先づ其の意を誠にす。其の意を誠にせんと欲する者は、先づ其の知を致す。知を致すは物に格るに在り。

とある。この文の語句、特に格物致知については古來色々の異見があるが、何れにしても、遠心的效驗を得んと欲する者は求心的修養に邁進せよといふ教義に些かのゆるぎもない筈である。中庸に

下位に在りて上に獲られざれば、民得て治む可からず。上に獲らるゝに道有り。朋友に信ぜら

れざれば、上に獲られず。朋友に信ぜらるゝに道有り。親に順ならざれば、朋友に信ぜられず。親に順なるに道有り。諸を身に反して誠ならざれば、親に順ならず。身に誠なるに道有り。善に明かならざれば、身に誠ならず。

とあるのもそれである。

諸君は今二十人に一人、十人に一人、五人に一人の勝者となつて鮮しい榮冠を戴かうと志してゐる。天下國家に爲すあらんとするの志程大きくはないにしても、つまりはさうした大志への前提として、亦遠心的效驗を期待するの大なるものである。從つて諸君の努力は求心的に大なるものでなくてはならない。

幹が大きければ大きい程根は太く深い。之を換言すれば、根の大能く幹の大を爲すのである。即ち求心的努力が大きければ大きい程、遠心的效驗は益々大きくなるの理である。一歩々々をしつかり蹈みしめて進む外に千里に達するの途は無い。

協同と孤獨

協同の力は大きい。諸君は同志と力を協せて能率の增進を圖るべきである。と同時に、孤獨の力、獨自の力、獨立獨行の强さをもしつかり保持しなければならぬ。そこにも矛盾の眞理は力强

く働いてゐる。

昔毛利元就は三人の子供に協同の偉大さを示すべく、三本の矢を以てした。一本づゝの矢は容易に折れる。三本を一緒にすれば折れないといふのである。それは協同の力を説くに於て妙を極めたものである。けれども吾々は折れ易い矢なるが故に協同するではいけない。お互に一本々々孤立して斷じて折れぬだけの強さを持つてゐて、而もさうした一本々々がほんとに力を協せて二本となり三本となつた時の強さ、その強さこそ眞個協同の偉大さである。

生れる時も一人だ。死ぬ時も一人だ。凡そ事をする時常に一人と覺悟しなければならぬ。「うまい者は小人數で食へ、仕事は大勢でやれ」といふ諺があるが、吾々は寧ろその逆を望むべきではないか。衆と共に樂む。蓋し樂みの最も大なるものである。敢然として一人事に當る。何と大丈夫の本懷ではないか。

何者をも恃まぬがよい。と同時に、何者とも相容れ、相提携し、相協同するの雅量を持たなければならぬ。

自己を信ぜよ

「叶はぬ時の神頼み」といひ、「溺れる者は藁をも掴む」といふ。自ら弱きが故に他を信じ、他に

すがらんとする者位哀れなものはない。

神を信じ佛を信じ道を信じ人を信ずる——信ずる者には迷ひがない。そこに牢乎として動かすべからざる心の力が生ずる。而も吾々はその「信ずる」信念を自己當體を信ずる信念の上に樹立しなければならぬ。信ずる友に裏切られて憤慨するのが人の常である。然し吾々はさうして憤慨する前に、裏切るやうな友を信じた自己の不明を恥ぢねばならぬ筈である。

之を極言すれば、眞の信仰眞の信念に於ては、我と彼とは融然として一つになつてゐるであらう。「何事もあなた任せ」であり、「何事のおはしますかは知らねども」であらう。けれどもそれは修養の極致であり、乃至刹那の法悦境である。苟も「信ずる」事を意識する時、「信ずる」自己當體を明かに意識して掛らなくてはならない。

他を信ずる前にまづ自ら信ぜよ。否自らをして信じ得る自らならしめよ。それが私の念願であり、諸君への忠言である。信じ得ぬ自己を誣ひて自ら信じて「自信」する「自負」位恐るべきものはない。私は諸君の所謂「自信」に於て屢々誣ひたる「自負」——負惜みを見出す事を悲しむ。

自尊と自遜

「獨立自尊」——何といふ尊い言葉だ。天上天下唯我獨尊しとは必ずしも御佛にのみ許された

言葉ではない。吾々は自己の尊さに目覺めなければならぬ。諸惡莫作は、諸惡を行すべく餘りに自己が尊い存在であると知覺する時、更に輝しい教條となるのである。而も同時に吾々は自遜謙讓、己を虛しうして人に頭をさげ、宇宙の悠久、佛神諸聖の偉大さの前に、心から自己の小ささを感得しなければならぬ。斯くしてこゝにも亦矛盾の眞理が顯現するのである。

自遜なき自尊は增上慢である。獨天狗である。自尊なき自遜は卑屈である。奴隷根性である。「天狗は藝の行詰り」といふ。苟も諸君の心に天狗が魅入る時、諸君の學問はもはや行詰りである。と同時に諸君の學問が卑屈となり奴隷的となつた時、寧ろ學ばざるの優れる事萬々たるを見るのである。曲學阿世の徒は、獨りよがりの增上慢と共に、無學の眞人よりも遙かに世を毒する俗物である。

最善と進歩

「最善は一つだ」といふ。而もその一つが「その時に於ける」一つである事を思はねばならぬ。吾々は常にその刹那に於ける最善をやればよい。常に最善を盡しつゝ進歩して行く時、昨日の最善は今日の最善でなく、今日の最善は明日の最善ではない。そこにほんとの進歩が見られるのである。

缺陷あるが故に改善し、不備あるが故に改良する。それは誠によい事である。然しながらそれは缺陷と知り不備と知りつゝ一時を糊塗して置いて徐ろにその改善を圖る底のものであつてはならぬ。諸君の聖戰に於て、聖戰のための學習に於て、特にその然る所以が見出される。

矢を學ぶ者が諸矢——二本の矢を手にして的に向つた時、深くその師に戒められた話が徒然草にある。

初心の人、二つの矢を持つことなかれ、後の矢を賴みて、初の矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一箭にて定むべしと思へ。

これがその師の訓戒である。筆者兼好は之を評して、

わづかに二つの矢、師の前にて、一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。

といつてゐる。恐るべきは刹那の懈怠である。只一本の矢に全心全靈を籠めて放つ。いくら全心全靈を籠めて放つても、技未だ至らぬ者は矢が的から外れるであらう。いくら外れてもその矢は全心全靈を籠めての矢なるが故に、その時に於ける最善の矢である。斯くて一矢は一矢と全心全靈の精進を積む時、矢は歩一歩的の中心に近づいて、遂に射るとして中らざるは無きにも至るであらう。これが眞の意味の進歩である。

韓非子に有名な彫刻上の喩話がある。彫刻に於て、目は小さい程よく、鼻は大きい程よい。目の小さいのは大きくする餘地があるが、大きいのは小さくはならぬ。鼻の大きいのは小さくはなるが、小さいのは大きくはならぬ、といふ事である。つまり事は常に改善の餘地を存して置くがよいといふ比喩である。そこに慥かに一面の眞理はあるが、然しそれは要するに戰國流の權道である。正々堂々事を爲す所以ではない。

日新の訓は尊い。日に新に苟に日に新に、事々物々常に新なれといふ事である。今日の今は永遠に逝いて歸らぬ。今日した事を明日やり直すと思ふは愚である。やり直すではない、同じ事を新しく又やるのである。否同じ事でなくて、同じ性質、同じ形態の事を幾度でも幾度でも常に新しくやるのである。さう考へる時、一矢的に向ふの訓へが今更のやうに有難いものとなるであらう。

常に最善を盡しつゝ進歩し向上する。さういふ意味に於てのみ、昨是今非であつてよく、五十年にして四十九年の非を改める事が尊いのである。

諸君の戒むべきは出來ない事でなくて最善を盡さない事である。力をセイブするなどいふ事は弱者の遁口上である場合が多い。獅子は兎を搏つにも全力を以てするといふではないか。諸君は難關を目標として、勝利の榮冠を夢みつゝ、涙ぐましい努力を續けてゐる學徒である。何の遑あつてか苟且苟安に一刻を送らうとはする。出來なくてもよい。間違つてもよい。常に自己の全心

全靈の力を棒げ盡してその目標に邁進せよ。今日の今は永遠に再び來らぬ事を眞に感受し善處する者のみが正しく勝つのだ。

凡中に非凡を見よ

凡てが珍しい人は、凡てが珍しくなくなる人である。形を見て驚く人は、物の本質に徹し得ぬ人である。凡中に非凡を見、非凡中に凡を見るでなくては眞の觀察とはいへない。

何が何やら、只凡てが珍しくて、アケラカンとロをあいて、ぞろ〳〵と案内者の後について行く種類の觀光團の態度では學問は出來ない。と同時に、「何だ下らない」「そんな事は珍しかネーヤ」と凡てをけなして掛る人にも亦眞の學問は出來ない。

一木一草の微にも宇宙の幽遠な哲理が働いてゐる。嵯峨として天を磨する大山も所詮は土壤の堆積に過ぎない。その凡常に非凡を見出した所から詩が生れ科學が生れたのだ。

助詞一つにも微妙な藝術心理は動いてゐる。滔々數千萬言、難語澁句の集團のやうな文も、煎じつめれば一語一句の延長に過ぎない。非凡に凡を見、大に小を見る時、凡の凡ならず小の小ならざる眞理がほんとによく分るのである。

形の恐ろしさに面くらひ、形のやさしさに氣をよくしてゐては、何時までたつても諸君の勉強

は本格のものとはならぬ。常に新しく見直す事だ。既知だの未知だの難だの易だのと言ふ事を止めて、一切を常に新しく見、常に新しく考へるのだ。

月は昔ながらの月だ、花は昔ながらの花だ。而も見る度に月は輝かしく花は美しい。徒らに新を喜ぶ者は、眞に新の新たる所以を知らざるものである。

準備の態度

選手教育

準備教育は選手教育である。體育のための運動、趣味のための運動には合宿入りの勞苦は無い。チームの一員として戰に臨む選手だけが、合宿に罐詰にされて血の滲むやうな猛練習をやるのである。進んで上級校の入試に應じない者は、學校の正科の授業だけ眞面目にやつてゐればそれでよいが、聖戰を目標としての學問、戰ひ勝たんがための學問をするものはそれでは足りない。學問の選手として自ら立つ者だからである。

競技の選手なるが故に學校の正科を怠つてその技の練磨にのみ專心してよいと考へる事は由々しい誤である。學校の正科は人並に勉強しつゝ、而も更にその技の練磨に精進する所に、選手としての尊さがある。

試驗を受けるが故に試驗に關係の無い科目は捨てて顧みない。それを受驗準備の賢策と考へる者は國家教育の賊である。現在中等教科のあるがまゝなる一切が、果して中等國民としての人格修養と基礎的研學とに必須缺くべからざるものであり、そしてその凡てであるか否かは、自から

別個の問題である。それは識者に依つて檢討に檢討を加へられねばならぬ問題である。只現に中等教育を受けつゝある諸君は、その課せられる科目の一切に忠實であるのが當然であつて、準備教育はそれを條件とし基調として、更にその上に加へられる所の選手教育でなくてはならない。

多數の人と同じ事をしてゐて、多數から選抜された少數にならうとするのは無理な註文である。十人中の一人になるためには九人に勝たねばならぬ。九人に勝つためにはその九人の人々がやる以上の努力をやらなくてはならぬ。

「上智と下愚とは移らず」といふ。勉強しなくても出來る人、勉強しても出來ない人、それは別個の存在だ。大多數の人間には努力と力とが比例するものである。人のするだけの事は自分もやる、その上に一歩でも二歩でも人に增した努力をやる人間は、一歩でも二歩でも人より先んじる人間である。それが選手教育の意味であり準備學習の意味でもある。

正しい態度

上述する選手教育の意味を只無茶苦茶に勉強すればよいと了解してはならぬ。學習の效果は必ずしも時間と分量とに比例する者でなくて、寧ろより多くその態度の如何に關する者だからである。

正しい態度の學習は常にプラスである。一つやれば一つのプラス、二つやれば二つのプラスである。間違つた態度の學習は概ねマイナスである。徒らに身心を勞して、謂ふ所の神經衰弱となるやうな勉強は皆マイナスの學習である。諸君の準備學習には何とそのマイナスの努力の多い事だ。

私は諸君の準備學習の態度を正しからしめ、常にプラスならしめんがために、次々にやゝ具體的な忠言を呈しようと思ふ。それは諸君に取つて極めて凡常な事に違ひない。先生からも聞き、先輩からも聞いて、耳に胝の出來てゐる種類のものであるかも知れない。然しながら眞理は常に凡常である。そして學問は決して耳に快いものではない。只その凡常を心から了悟し、その苦言を甘受して、喜んで之を實行する事を外にしては、必然の勝利は諸君の頭上に微笑まぬのである。

シーソーの戒

シーソーといふ運動具がある。一方が上ると一方が下る。而もその位置は常に不變だ。同じ高さに上つたり下つたりしてゐるに過ぎない。運動としては慥かに面白い運動である。然しながら諸君の學習はそれではいけない。

大局に目を注げといへば部分を忘れる。部分を忽せにするなといへば大局がお留守になる。答案をきれいに書けといへば內容の充實が缺ける。もつと內容をしつかりやれといへば答案が汚く

なる。さうして一方が上れば一方が下つて、いつも同じ力に低迷してゐる。正にシーソーである。

一方が或るレベルまで上つたら、他方をもそれと同じレベルまで上げよ。それが向上といふものである。その分量はどんなに僅かでもよい。諸君は常にさうした向上への努力を積む事が大切である。シーソーの努力は所詮難關を突破する所以の賢策ではないのだ。

科としての學習

一切の學問に於て大體四つの分野がある。それは學として研究すること、直接生活上に應用すること、趣味修養としてやること、科として學習する事である。やかましくいへば、研究的態度、實用的態度、趣味修養的態度、學習的態度である。諸君の中等教科乃至聖戰のための勉強は言ふ迄もなくこの最後の場合である。

科としての學問は、他の一切の基礎根柢としての學習である。學そのものゝ蘊奥を究めて前人未發の發見發明をする事でもなく、そのまゝそれを實生活上に應用する事でもなく、又之を樂み之に學んで魂の糧とする事でもない。それ等一切の學問を正しく樹立するための基礎工事である。勿論この區分は極めてデリケートなもので、截然たる境界は立てにくいのであるが、然し諸君は諸君の當面の勉強が「科として」であるといふ事だけは、常にしつかり考へて居なくてはならない。

科としての學習は、範圍限界の明確である事を第一の條件とする。

中等教育の課程として、これだけは是非覺えてゐなくてはならぬ。これ以上の必要もなければ、これ以下でもいけない。

といふ明確な範圍限界が立つてゐなければならぬのである。それは目下の所では教科書を以て端的の標準とする外ない。現行教科書の凡てが果して中等教科として然かあるべき範圍限界にぴつたり合つてゐるか否か、抑も文部當局が定めてゐる所の教程が果して安璧であるかどうか、それは識者の檢討に俟つべき別個の問題である。少くも諸君は教科書を標準として自ら學習すべき範圍を明確に意識して掛らなくてはならぬのである。

次に大切な事は、その知識の嚴正適確であるべき事だ。例へば文字を書くにしても、世の中の實際からいへば、かなり曖昧な字でも立派に役に立つ。然し科としての文字——書取に於てはそれは許されない。基礎工事は嚴正そのものが生命だからである。斯くて諸君の學習の結果は、常に點數を以て嚴格に計上されて、その僅か一點の差が、はひれるかはひれないかの分水嶺をすら爲すのである。

要は學ぶべき範圍をしつかり意識して、その範圍内の事をほんとに嚴正に覺えるといふ事、それが「科としての學習」の意味である。

根柢の勉強

同じく範圍内の事――教科書に書いてある事の中でも、特に大切なのは根柢の事項である。數學でいへば公理定理公式の類がそれである。國漢文や英語でいへば讀解作文の基礎となる所の文法や單語がそれである。同じ單語といふ中にも、のべつに出て來る凡常の單語もあれば、めつたに出て來ぬ特殊の單語もある。例へば私の『更訂國文解釋法』に項目として出してある百五十の單語などは、凡常單語の代表的なものである。諸君の勉強は特に斯うした根柢に徹する事が大切である。

珍しいものは注意を惹き易く、凡常のものは看過し易い。それが人情の常である。所が科としての學習、基礎工事としての學習に大切なものは、極めて稀に出て來るやうな特殊なものではなくて、のべつに出て來る凡常の事項である。そこに諸君は深く思を致さなくてはならない。

これは雜誌「考へ方」を通しての實驗であるが、嘗て誌上綜合試驗の問題として「いとゞ」を含んだ國文を出した時、それを「一層」と正解し得たもの僅かに二割、又「則」を含んだ漢文を出した時、それを「とりもなほさず」と誤解したもの實に八割、要するに何れの場合にもこの凡常の根柢語を正しく解し得たもの僅々二割といふ有樣であつた。

問題をやるにしても、一問を一問として諳記するのでは心細い。その問題を十分に理解して、

それが持つ所の根柢をしつかり掴み、それが正しい解決に達した所以の過程をしつかり意識して、その一問を通して他の十問百問を解決し得る力を養ふやうにしなければならぬのである。

問題は殆ど無限にあり、時間と勞力とはごく僅かに限定されてゐる。限定された時間と勞力とを以て無限の問題を盡く學ばうとする事は確かに不可能事である。だから諸君は徒らに多くの問題、珍しい問題をやらうとせず、少數の問題、ありふれた問題をほんとに理解して、上述するが如き態度に於て、試驗にどんな問題が出ようとも、それが苟も中等教科としての範圍内である限り、正しく之を解決し得る力を養ふやうに努めねばならぬのである。

チームの統制

野球のやうな團體競技に於て殊に大切な事はチームの統制である。ナインが心を一つにして守備するチームは堅い。諸君の勉強も亦その通りだ。

試みに高等學校を標準として入試に必要な科目のチームを編制して見よう。まづ代數と幾何――數學のバッテリー、英文和譯と和文英譯――英語の一二壘、それから國文の三壘、漢文のショート、作文、文法、書取の外野といふ所、諳記物はコーチャーに立つか、ベンチに溫つてゐてリリーフに立つかである。このチームの統制が完全に取れる時、どんな難球――難問が飛んで來ても、

めつたに敵に乘ぜられる事は無いであらう。そしてこのチームを完全に統制して行くべき監督又は主將は實に諸君のアタマ自體である。

統制を忘れて自分一人ファインプレーを誇らうとするやうな選手は、多くの場合チームを毒するものである。混成チームに於て、その一人々々がベストメンバーでありながら、結果に於てそれがベストチームであり得ぬ實例は、吾々の屢々實見する事實である。强ければ强いなりに、弱ければ弱いなりに、各選手が皆チームの統制に從つて、九人只一心になつてやるやうに、出來る出來ないは兎に角として、主要科目の一切が常に諸君自らのアタマに統制されてゐる事が、準備學習としての一番强味である事を思はなくてはならない。

デパート式學習法

チームの統制といふ事は、之をデパートに譬へる事も出來よう。商業學上の專門語としてデパートメント・ストアが如何に定義せらるべきかは姑く措く。吾々の常識からいへば、各部門——呉服部なら呉服部、圖書部なら圖書部が、何れも獨立した一個の商店たるだけの本質を備へてゐて、その全體が一つの經營中心に依つて有機的に統制されてゐるものがデパートであらう。

數學は數學、英語は英語、國漢は國漢として、それ〴〵獨立した科目としての力を十分に備へ

ながら、而もそれが諸君のアタマ自體に依つて有機的に統制されて、互に有機的な脈絡を保つてゐるやうな勉强——それが中等教科として最も正しい勉强であり、入試準備として最も賢明な學習である。

平行式と集團式

學校の時間割のやうに、毎日々々主要科目の勉强を平行に進めて行くやり方もあれば、今日は數學、明日は英語といふやうに、集團式に勉强するやり方もある。その極端なのになると、或一科目についての參考書を一通り讀み上げる迄、毎日々々そればかり續けるといふやうな勉强法もあらう。

その可否は遽かに斷じ難いが、準備學習として最も適切なのは三時間程度の集團勉强を平行に進めるやり方だと思ふ。それは今の多くの入學試驗の形をそのまゝ學習上に取入れたやり方である。多くの入試は三時間制で、第一日は國漢、第二日は數學、第三日は英語といつた風に施行される。そこで諸君に最も大切なのは、一科目を三時間續けてやるアタマだといふ事になる。

在學中の準備としたら一日三時間は許される最長のものであらう。復習豫習等に過重な要求をされて、そんな餘暇の少しも無い學校に學ぶ者は別だ。若し一日三時間を準備のために割き得る

としたら、一日一科の平行式で參考書なり何なりの勉強をやればよい。既に學校を卒へて專心準備に沒頭し得る人は更に好都合だ。午前三時間、午後三時間、夜三時間、それを最高の勉強時間として、三科目を平行に進めて行く。その中の何れかの三時間が、時に慰安休養のために割かれても構はぬ。只三時間を一單位としての一科目の勉強といふ事だけは、なるべく破壞しないやうに持續するがよいのである。

一年を三期に分けて

入試準備は一年を原則とする。早く着手して二年も三年も準備學習をやる人があり、又事志に反して二年三年の準備を餘儀なくされる人もあらう。然し準備の原則は

來年必ずはひるやうに

である。來年を考へる時、その期間は最長一年である。捲土重來だの、浪人三年だのといふ言葉は、實際には適切でない。準備するものの心の置き所は、いつでも

この一年間

であらねばならぬ。そこでその一年の振り當てであるが、私は中等學校の制度と同じやうに、四月から七月、九月から十二月、一月から三月、と三期に分けて、而もそれを循環式に勉強する

のが最も適切だと思ふ。それには一科一冊主義で、中心となる教科書なり參考書なりを極めるのである。他に補助のものがある事は、それが組織體系乃至主義方針に於て中心書冊と撞着しない限り少しも差支ない事であるが、兎も角も主體となり中心となるものはどうしても一つ定めなくてはならぬ。そしてまづ第一學期に一通りその書を學んで了ふ。時間と勞力との關係上、それが完全に學びきれぬとしたら、例へば根柢事項と例一だけといふやうなやり方でもよい。兎も角も一應その書の終まで學んで了ふ。そして二學期に今一度最初から繰返して理解記憶を確實にする。それは必ず一頁から順序を追つてやるのである。第三學期に入つては、隨時隨所を開いて自分の理解記憶の度を確かめ、又は雜題的に勉強するといふ行き方がよい。

夏期八月の一ケ月位は、一寸その書から離れて見るがよからう。そして夏期講習などに出るもよし、地を轉じ氣を新にし體を練つて二學期に備へるもよい。

試驗練習

受驗に必要な事は實力を正しく發表する事である。實力の無いものは固より問題ではない。立派に受かるだけの實力を持ちながら發表の拙いがために落ちる事も決して珍しい事ではない。そればかりでなく、發表して見てほんとに實力の有無が分り、同時にそれに依つて實力が養はれて

行くものである。

例へば一つの文章にしても、讀んで見てよくその内容の意味が分る、そこでこんなものはやさしいと考へる。所がさて筆を執つてその解を書くとなると仲々うまく行かぬ。原文に即して解くと思想も徹底せず口語としても甚だ不自然なものになる。思想がよく通り口語としても平明自然なものにしようとすると、原文の表現からひどく掛離れて了ふ。斯ういふ惱みは學に忠なるものの常に體驗する所である。

さういふ意味に於て、諸君は出來るだけ多く試驗練習をやつて見るがよい。學校や講習會へ通へばその機會は勿論澤山あるが、家にゐながら通信で受けられる試驗練習もいくらもある。眞劍な態度でさういふ試驗に應ずる事は、諸君の準備學習に於て最も效果的な行事の一つである。

眞劍な態度——これが試驗練習に於て特に大切である。よい點を得ようがために字書を引いたり人に聞いたり、むやみに時間を掛けたり、凡そ實際の入試に許されぬ事をするなどは眞劍ならざるの甚しきものだ。

いくら試驗練習がよいからといつて、中心書冊の勉强もやらずに、むやみと試驗ばかり受けてゐる所謂「試驗道樂」も亦譽めた事ではない。私共の『日刊受驗研究』では會員に限つて一科目毎に一ヶ月三回の試驗が受けられる事にしてゐる。十日に一回の試驗、これが恐らく試驗練習と

して一番多い標準としてよからうと思ふ。

採點の嚴正

試驗練習の採點は嚴正であるべき事勿論であるが、同時に大切な事は、はひれるかはひれないかの水準になる事である。點數それ自體でなくて、その點數が合格圏の内か外かを明示する事である。

諸君は甘い點數を附けて貰つて喜び、辛い點を貰つて悲觀する。なるほど時には甘い點が奬勵になつて、そのお蔭で元氣づいてはひつて了ふといふやうな事もあらう。然し甘きが故に油斷してはひれぬといふ事例の方が遙かにそれよりも多くはないであらうか。

例へば作文の定點を五十點とする。そして千人に百人の合格を定めるとする。その時四十五點が五人、四十點が十五人、三十五點が二十五人、三十點が五十五人とすれば、三十點までが合格で二十五點以下は不合格といふ極めて明瞭な水準が出來る。なるほど定點の半分では落ちても仕方がないといふ事になる。所が點數的に甘く採點して、四十九點が五人、四十八點が十五人、四十七點が二十五人、四十六點が五十五人とすると、五十點に對する四十五點——前者の採點では最高の五人が取つた點數の人が落第するといふ奇觀を呈するのである。

斯ういふわけだから、諸君は點數自體を氣にする前に、自分の取つた點數が總受驗者中の如何なる位置に在るかといふ事を考へなくてはいけない。勝つための勉強である以上、いくら高い點數でもそれが負ける事を意味してゐては何にもならぬからである。

賽の河原

佛敎に賽の河原といふ涙ぐましいお話がある。死んだ幼な兒が賽の河原に集つて「一つ積んでは父のため、二つ積んでは母のため」と、せつせと石を積み上げると、そばから赤鬼青鬼が杖でそれを崩して了ふといふのである。

諸君の勉強も往々にして賽の河原になる惧れがある。心の赤鬼青鬼——怒り鬼、惰け鬼、迷ひ鬼、樣々な欲情の鬼が折角積み上げた學問の石を打崩す事である。

「こんな事をしてゐてはひれるだらうか」「もつといゝ勉強法はないかしら」「若し來年はひれなかつたらどうしよう」「何だかこの本は駄目らしいから外のに變へよう」「一層の事志望を變へて了はうかしら」——勉強をしようと思ふとすぐこんな考が飛び出して來る。醫家はそれを神經衰弱と呼ぶであらう。受驗病といふのもそれである。それが心の赤鬼青鬼だ。その時諸君はいたいけな幼な兒である事に甘んじてはならぬ。自ら聖戰の闘士を以て任ずる諸君ではないか。敵は本

能寺ではない。自己の内に潜んでゐるのだ。己に克つは勝つの最初にして又最後である事を思つて、決然として心の鬼を征服し去らなくてはならない。

他山の石

詩經小雅に「他山の石以て玉を磨くべし」とある。その邊の山から出る粗惡な石も、それに依つて玉を磨くに足りるやうに、不善の人も善人の德器を成すの具となるといふ喩である。

他山の石も玉を磨くのに役立つ——どんなものでも學德を向上する資料になる。これは實に有難い敎訓である。この敎訓について特に考ふべきは、他山の石も自ら取つて玉を磨く事に利用するが故に玉が磨かれるといふ大切な事實である。「棚からぼた餅」といつても、口を開けてゐなくては何にもならぬ道理である。

諸君は兎もすれば他山の石の玉を磨くに足る事を忘れ、それを取つて玉を磨く事を忘れてゐる。別の言葉でいへば、間接の利益を忘れ、一見無價値なものを有價値化する事を忘れてゐるといふ事である。

机にかじりついて勉強するばかりが勉強ではない。一切の生活行動は、之を他山の石として利用すれば、皆勉強を力づける資料である。その心懸がなくてはほんとの勉強は出來ない。

要は自己の精神生活を中心として、一切の事態行動をその圓周上にあらしめる事である。自己の精神生活が學德に在る時、自己の生活環境にはひつて來る一切の事物事態を、悉く他山の石として、自己の學德を磨く資料とする事である。斯うなつた時、上に述べたやうな受驗病――神經衰弱の症狀は夢の覺めたやうに消え去るであらう。

レディーメード

參考書はレディーメードである。或一人の注文に應じて作つたものでなくて、それを必要とする範圍の大多數の人々を目標として作つたものである。それに對してぴッたり自分の要求に合ふ事を求めるのは、求めるものの無理である。勿論レディーメードの中にも丸で注文して作らせたやうにぴッたり合ふのがあらう。然しそれは偶然であつて必然ではない。

レディーメードの洋服を買ふ者は、多少大き目のを買つて自分の寸法に合ふやうに詰めるのが一般である。參考書もその通りだ。自分のアタマより多少上のもの、自分の要求より多少叮嚀なものを選んで、それを自分のアタマの寸法に合はせればよい。換言すれば、その中から自分にほんとに理解される部分だけを擇んで學習すればよいといふ事である。

世には參考書の簡明を推賞する聲が尠くない。そこにも色々の傾聽すべき理合はあらう。が、

參考書の簡明を求めるのはレディーメードの洋服の小ならん事を求めるのと一般、その根本に於て既に自家撞着である。

自分の寸法に合せて詰める、自分のアタマに應じて分らぬ部分は捨てる。それがレディーメードに對する大切な用意である。この用意がある時、參考書に對して「むつかしい」「くどい」といふ非難は無くなる筈である。

教科書では分らぬから先生に教へて戴く。それでもまだ分らぬから參考書を買ふ。その參考書が簡明に諳記すべき部分だけを示してある事を望むなどいふ事は、準備學習を機械的諳記化し、非學問化し、非教育化するの甚しいものである。

異說に對する態度

學問殊に解釋上の學問には異說が多い。從つて諸君も、甲の參考書と乙の參考書、甲の先生と乙の先生と、その示す所に甚しい相違がある場合に逢着する事があるに違ひない。その時何れに從ふべきかと迷ふのは當然である。

迷ふのは當然であるが、迷つてゐる事は戰ふ者に取つて不利この上もない事である。そこで諸君は異說に對しても亦毅然たる態度を持つてゐなければならぬ。

それは現在の自己のアタマの最善を盡して、出來るだけ穩健に、出來るだけ平靜に考へて、自分に最もよく納得の行く一つを擇んで、それをしつかり覺えるといふ事である。

後になつて考が變る事は少しも差支ない。それが進歩である。諸君は只今現在のアタマに於て最善とする所に從へばそれでよい。

自分自身が參考書や先生の說に反對して一つの異說を立てる事も必ずしも惡い事ではない。が、その時は特に謙虛な態度、冷靜なアタマが大切である。殊更に他に反抗せんがために異を立てて自ら快しとするが如きは、學問を賊するの甚しきものである。

自己を中心として

學ぶ者は諸君自らだ。試驗を受ける者は諸君自らだ。諸君は飽く迄も自己を中心として自己の血とし肉とするやうに勉强しなければならぬ。

さういふ事の意味は、先生を、先輩を、參考書を、それ等一切の指導者を馬鹿にして、自分勝手に振舞へといふ事では斷じてない。只それらの指導に盲從して、自分を生命の無い「勉强の器械」にして了つてはならぬといふ事である。

自己を計り自己を知れ。自己の長と短とを合せ知つて、自己の魂の欲求から進んで自己に最も

適切なものを擇んで勉强せよ。附燒刃では實戰の役には立たぬ。

戰前の心の落着

戰の日が迫るにつれて心の落着が段々失はれて來る。それは人情の自然であるが、實戰に取つてこれ位恐ろしい事はない。

勝敗の豫想に現實を混亂させてはならぬ。優勝の美しい詩を夢みるはよい。慘敗のむごたらしい姿を心に描くは愚だ。そして何よりも大切な事はくよ〳〵しない事である。ぐツすり眠れるやうな狀態に努めて自ら心身を置く事である。更にいへば、眠れぬなら眠れぬでもよい。只それを氣にしてくよ〳〵しない事である。

戰前に新しい問題など漁るのも賢明な策ではない。一年間いくらみつちりやつたにしても、まだまだ出來ない問題などはいくらもあらう。そんなものに引懸つて自信を無くするのは愚だ。入試は難問のみの集團ではない。根柢の力と必勝の氣魄とを以て之に向ふ時、難關亦何ぞ畏るゝに足らんやである。

實戰の用意

總點の勝敗

今日の入試は概ね總點制である。總點の多い順に入れるのである。勿論或一科が全然零といふやうな極端なものは別であらうが、さうでない限りは總點で勝つた者が勝である。諸君の策戰は必ずこの基調の上に樹立されなくてはならぬ。

どの學科も平均によく出來る事は固より望ましい事であるが、人はアタマの傾向に依つて學科に出來不出來のあるのが普通である。出來ない學科でも努力すれば或程度までは出來るやうになる。然しその度合は大抵知れたものである。出來る學科、すきな學科は、少し馬力を掛けるとうんと進む。そこに勉强の賢策が立てられねばならぬのだ。

出來ない學科は人並以上に努力して或程度まで出來るやうにしなければならぬ。さうしないと他の學科でかせいだ點に食ひ込む事になる。出來る學科は益々力を入れるがよい。さうするとその科に於て人一倍澤山の點が取れる。これが取つて取られぬ勉强法である。

私の採點經驗からいふと、定點の半分が合格圏である。二百點滿點で百點は立派に合格圏内である。はひる前提としてどうしてもまづ合格圏に入らなくてはならぬ。即ち出來ない學科でも定點の半分だけは取れるやうにする事である。さうすれば出來ない學科で合格圏に食ひ止つて、出來る學科で悠々とはひつて了ふといふ事になるのである。

最後まで一心に

試驗に於て最も恐るべきは心の動搖である。腐つたり伸びたりする事である。一問の出來不出來、一日の出來不出來に心のぐらつく事である。

出來なくて悲觀し出來て樂觀する。それは當然の人情である。然しそれがために心を動搖させてはならぬ。腐りもせず伸びもせず、最初から最後まで只滿々たる鬪志を持ち續ける事だ。最後の瞬間までガンバリ通す事だ。

要するに勝つた方がよい。

勝つた方が勝つたのだ。

さればとて、戰に卑劣の手を弄すべきではない。飽く迄も正々堂々と戰ひ拔く事だ。

ほんとに戰の終るまでは決して戰の蹟を振向くな。只まつしぐらに次へ〳〵と邁進せよ。

一題や二題出來なくても平氣だ。

總點だ。

最後の勝利だ。

九回の裏ではもう引繰り返す餘地はないなどとどうして言へる。仕合を投げる位卑怯な事は無い。諸君は只眞一文字に最後の日の最後の一秒までガンバリ通さなくてはならないのだ。

問題の要求

問題自體を見る前に、まづその要求をしつかり見なければならぬ。私共はよく「次の一文に句讀を施し且つ之を解釋せよ」と要求する。その時句讀を附けない答案が必ず三四割に上る。丸でグラウンド・ルールを無視しだブレーである。

色々と細かい要求を附けて出すのが最近の入試問題の一傾向だ。「この學校の要求はいつも斯うだ」などと極めて掛らずに、諸君は先づ問題に對する要求をしつかり究めて、萬遺漏のないやうに答案を認める用意を忘れてはならない。

きれいで見易い答案

讀んで採點するのでなくて見て採點するのである。實際はさうでないかも知れないが、少くも

諸君はその覺悟で答案を認めなくてはならぬ。

一目見て何が書いてあるかが分るやうな答案を書く事である。

字のうまいまづいではない。感じのきれいか汚いかである。見るからスーツとしてきれいな感じを與へる答案でなくては採點者に好感は與へない。

何だきたない。

こんな感じを採點者に持たせる位不利益な事は無い。二十人に一人を抜き、十人に一人を抜くのである。よく〳〵の例外は別として、まづ以て汚い答案、見にくい答案は後廻しにしても、立派な内容を持つた答案を選び抜くのに困らぬであらう。かくて

答案をきれいに見やすく而も早く書く練習

が諸君に取つて何よりも大切な事となるのである。

中らずと雖も遠からず

ぴつたり合つた答案は言ふ迄もなく最上のものである。然し一切の問題に對してそれを望む事は事實不可能である。そこで諸君は少くも「中らずと雖も遠からざる」答案を作るやうに心懸けなくてはならぬ。

それは大局を正しく掴む事である。根抵をしつかり徹底させる事である。殊に解釋上の問題などはさうである。大體の文意をしつかり掴み、節々の語句に正しく徹底すれば、枝葉末節に多少の過誤缺陷があつてもまづ負ける心配は無い。之と反對に、枝葉末節にいくら細かい注意が行き屆いてゐても、大筋を誤つたものは忽ちノツク・アウトである。

お嫁に行く前に育兒の實習をしないでも、母となれば必ず赤ん坊の氣心が分つて、大過なく赤ん坊を育て上げる。母としての赤誠が然らしめるのである。これが「中らずと雖も遠からず」といふ言葉の根源である。凡常に徹し根抵に培つてほんとに正しい勉強を續けてゐるものは、どんな問題に逢着しても必ずや「中らずと雖も遠からざる」答案を作り得るであらう。

新しく考へよ

たとひ習つた問題がそつくり出たとしても、諸君は必ずそれを新しく考へて見なければならぬ。そこにどんな加工が施してないとも限らぬ。よし又加工が施してないにしても、最善の答案は最善の努力に依つてのみ得られるのである。必勝の氣魄を籠めて最善の答案を書く事が優勝の最善策である以上、考へもせずに只記憶を記憶としてそのまゝ再現してすまして置くやうな事は、斷じて策の得たるものではないのである。

より多くの力を易に注げ

問題の全體に目を通して、自ら易と信ずるものから片付けて行く事は、總點制に於ては絶對に必要な策戰である。これは改めて言ふ迄もなく諸君が實行する所であらうが、この際長るべきは易を易として簡單に片附けて早く難に掛らうとする態度である。

同じく出來たといふ中にも、

よく出來た

よりよく出來た

最もよく出來た

といふやうな階級があつて、一點二點の微細な差は實にそこから生じて來る。而もその一點二點の差が實に勝敗の岐れ目になるのだ。假に八百點滿點でその六割の四百八十點が最下點合格だとする。その時四百八十一點は明かに合格であり四百七十九點は明かに不合格である。そこが競爭の妙味でもあり恐ろしさでもある。五百點以上の人や四百點以下の人はその場合競爭圈を超越してゐる。勝つか負けるかの微妙な兼合は實にこの一點二點に存するのである。

斯う考へる時、諸君はやさしいと信ずる問題にしつかり力を注いで、その答案をよりよくする

事の賢明さに思ひ至る筈である。

むづかしい問題は寧ろ大膽にぶツつかつて行くがよい。根柢さへぐらつかせなければ末葉などはごまかしても嫌はぬ。ごまかすといふ事は善い事ではない。然しこじつけるより遙かにいゝ。こじつけるとは柄の無い所に柄をすげる事である。自分勝手に根柢を創作する事である。ごまかすとは根柢に觸れない事である。それに對する根柢が自分に分らぬ時、そつと上面を撫でて置く事である。多くの場合それでも「中らずと雖も遠からざる」答案は得られるものである。

易問で滿點、難問で半分
悠々合格疑なしである。

白紙のアタマ

更に一歩を進めて言へば、既知未知難易を超絶して白紙で問題を見るアタマである。眞の難易は斯くして始めてほんとに正しく見分けられるのである。

行き詰つた時元の白紙に戻るアタマが又實に大切である。それは最初から出直すアタマである。全然新規に考へ直すアタマである。

勉強中にもさうであり、試驗に直面してもさうである。段々問題を解いて行く中にどちやくちやになつて了つてどうしても出來なくなつたら、そこで打切つて又最初から出直す事である。どこが悪いかと吟味して、悪い所だけ直さうとするのは、甚だ賢明のやうで實は甚だ不賢明である。

今の六代目菊五郎は夙に踊の名人として知られてゐる。彼が幼少の頃、九代目團十郎について踊を學んだ時、例へば娘道成寺のやうな長い踊、一時間も二時間も掛る種類の踊でも、氣に入らぬ所があれば、團十郎は何遍でも最初から踊り直させたといふ。その辛い修行によく堪へたが故に、彼の天分が今日の大成を見るに至つたのであらう。何事にも大切な事は煩を厭はずして何遍でも最初から出直す努力である。兎に角諸君の聖戰に於て最も尊く最も力強いものは、諸君自らの

白紙で考へるアタマ
常に白紙にかへるアタマ
である。

神經質にならぬ攝生

何事を爲す場合にもさうであるやうに、聖戰に最も大切なものは身心の健全である。從つて聖戰に當つて特に攝生に留意すべきは更めて言ふ迄もない。

然しながら攝生に對して神經質になる事は更に恐ろしい事である。風を引かぬやうに注意し、

腹をこはさぬやうに注意し、よく眠るやうに注意する事は甚だ大切である。が、一寸風を引いたといつては心配し、腹が痛んだといつては心配し、眠れぬといつては心配してゐる事は、風を引いた事、腹の痛む事、眠れぬ事以上に心身を不健全にするものである。さうした場合、平靜な氣味で醫者に診て貰ふのはよい。時に又大切な事でもある。然し自分一個の診斷で徒らに心を勞するのは愚である。

要は凡常の生活に終始して殊更に變つた事をしない事である。「こんな事ではいけない」といつて徹夜の勉强をして見たり、「どうも元氣が無い」といつて榮養物をむやみと攝取したり、乃至特別の健康法といふやうな事に熱中する如きは、戰前戰中の健康法として策の得たるものではない。

凡々として平均の勉强を持續し、淡々として一切を氣に掛けぬ事である。「心こゝに在らざれば視れども見えず聽けども聞えず」といふ。諸君の心が眞面目な勉强に集注してゐる時、諸君の心身を傷つけるやうな一切の物は、諸君の目にも耳にも入らぬ筈である。

運動の類もさうだ。日頃持續してゐて、勉强の防害にならず、身心に疲勞を感ぜしめない程度のものを、そのまゝ續けてやつてゐればそれでよい。「勉强のために運動が少くなつた」と思ひついて、急に過激の運動をやるやうな事は、正に二重に身心を苦しめるものである。

國文について

國文解釋の一義的態度

一義的態度とはその事の本質に徹した態度である。文を解釋するといふのは、その文の意味と情調とを原文よりもずつと分り易いやうに再現する事である。さういふ意味に於て、立文を創始藝術と稱し、解釋を再現藝術と稱してもよいと思ふ。解釋は、だから原文の意味情調が平明化されて而もなほ一種の藝術としての味を持つ事をその本質とする。

單に原文の一語々々を言ひ換へる事

それは斷じて解釋の一義的態度ではない。私は『更訂國文解釋法』に於て直解と成解とを示した。その直解は或はさうした意味に於て二義的の非難を蒙るかも知れない。然し私自らの意圖としては、直解は原文の表現に卽した解釋、成解はその意味と情調とに徹した解釋であつて、直解は一義的解釋への前提といふつもりである。

解釋に於て甚だいけない二つの態度がある。便宜上一つを愚解と呼び一つを迂解と呼ばう。愚解とは解そのものの文意が平明自然の口語からは凡そ緣の遠い所謂講釋言葉である事だ。「豈夫れ

然らんや」――「どうしてそれがさうでありませうやありません」「いとこそうれしかりけれ」――「誠にまア嬉しくありましたわい」といつた調子がそれである。迂解とは必要以上に言葉を補つて、解釋と說明とをまぜこぜにしたものである。「津の國のこやのひまなきまつりごとを聞しめすにも、難波の葦の亂れざらむことをおぼしき」――「津の國は攝津の國の事で、そこに昆陽野といふ野があつて、その野の小屋は、葦の八重葺などいつて、屋根がすきまなく葺いてあるといふ事が歌などによく詠まれてゐる。ひまはすき間の意に暇の意を重ねた言葉で、卽ちその屋根のすきまのないやうに誠にお忙しくて暇のない政事を御執り遊ばすにつけても、難波は今の大阪の古名で、昔は葦が生ひ茂つてゐる事で有名であつた、その葦は風が吹くと亂れるものだが、そのやうに亂れる事のないやうにと思召されたのであつた」まさかこれ程極端ではない迄も、大體斯ういつた調子の解が所謂迂解である。前者は平明な口語の上に再現するといふ根本義に反し、後者は原文よりもずつと分り易く再現するといふ根本義に反する。

諸君は、成解は勿論假に直解に止る場合にしても、いきなり一語々々の言ひ換へをやらうとせずに、まづ原文そのものを熟讀翫味した上で、なるべく原文の表現に近く、而も變な、日頃使ふ言葉とは似ても似つかぬやうな所謂講釋言葉にならぬやうに、出來るだけやさしい、平明自然な話し言葉に言ひ換へるといふ態度を、常に嚴然として保持しなければならない。

國文考究上の諸方面

ほんとに正しい一義的成解を得るためには、只ずる〳〵と原文を口譯してすまして置くといふやうな事ではいけない。表現については、單語、文法、文脈、句讀といふやうな方面の考察を重ね、內容については十分にその思想を究めて、原文の表現から離れて之を詳悉する事も出來れば要約する事も出來るやうにし、更に藝術としての見地からその文の情調をしつかり味つて、之を鑑賞批評し、之についての自家の感想を述べ得る所まで達しなくては本格でない。斯ういふ事の一つ〳〵が入試の問題として要求される例も尠くないが、單に解釋なり摘解なり大意なりの要求された場合にでも、斯うした過程を經ると經ないとでは、解そのものに非常な違ひがあるのである。

單語について諸君の沒頭する所は譯し方である。それが極端になると「いと」は「誠に」、「こそ」は「まア」、「けり」は「わい」といつた風に譯し方を機械的にきめて置かうといふ事にさへなる。私は『更訂國文解釋法』の項目の語に答案的代表譯といふものを示したが、それは決してさうした意圖ではない。諸君はその下に與へられてゐる說明を十分に讀破して、然して後にその代表譯を理解記憶しなければならぬのである。

單語の意味は前後の關係によつてきまる。一體文は言葉の級數的排列と稱して然るべきものである。

1, 2, 3, 4, 5, 6,……

これは所謂順序數だが、級數的にいへば公差1なる等差級數である。文で謂へば嚴正そのものやうな法律の文句の類である。普通の分りやすい文章といふのは、概ね

1, 3, 5, 7, 9, 11,……

公差2の等差級數である。公差が大きくなればなる程分りにくい文になる。詩や歌は多くの場合思想の飛躍を持つた等比級數である。又文でも詩でも、往々にして等差と等比とが混淆した所謂雜級數をなしてゐる。が、何れにしても何の脈絡もなく單に語を列べたやうな文はあり得ない筈である。從つて諸君は、常にしつかり前後の關係を究めて、それを基調として單語の意味を考へ、一つ〳〵の單語が全文の思想と撞着する事のないやうに、正しく解出しなければならぬ。

文法は立文の約束である。從つてそれは解釋と作文との基礎根柢として始めて學習の價値がある筈だのに、諸君は概ね文法を文法としてその示すやかましい規則を諳記するに止つて、之を解釋や作文の上に應用しようとしない。文法の試驗に應ずるだけならそれでもよい。苟も正しく文を解し文を作らうとする者はそんな事では駄目だ。殊に文語法は古文解釋の重要な根柢である。

『更訂國文解釋法』の文法篇は、さういふ建前から諸君に活きた學習を要望してゐるのである。文脈は文の筋である。どの言葉はどこ迄掛り、どの言葉とどの言葉とが互に呼應してゐるかといふやうな考察である。その實例は『更訂國文解釋法』の解釋篇中にいくらでも見出される。文脈考察に於て世に共通した弊は餘りにも近視眼的だといふ事である。例へば增鏡の、

かの島には、春來てもなほ浦風さえて浪あらく、なぎさの氷もとけがたき世のけしきに、いとどおぼしむすぼるゝ事つきせず、かすかに心ぼそき御すまひに、年さへ隔りぬるよと、あさましくおぼさる

といふ一文にしても、

かの島には……いとどおぼしむすぼるゝ事つきせず……あさましくおぼさる

と大きく呼應してゐる筋に目をつければよく分るのに、

かの島には春來ても、

とすぐ近視眼的にくツつけて了ふために、文の筋が立たなくなるのである。何でも彼でも遠くの方へ掛けて見ればよいといふのではない。凡て文を讀む時、局部々々に考を蹋蹐させずに、大きく全體を見通して、しつかり筋を立てなくてはいけないといふのである。

句讀については『更訂國文解釋法』の文法篇に說いた通りである。概して日本人は句讀に對す

る考へがルース過ぎるやうだ。そしてその根本の誤は、句讀は語と語の境目だと思つてゐる事である。それがために「月、花に映じ花、月に輝く」といふやうなテンの打ち方をするのである。テンとテンとの間は必ず語句の一グループでなくてはならぬと考へたら、そんな馬鹿氣た打ち方はしない筈である。要するに句讀は、

意味を分りやすくするため

文の組立がよく分るやうにするため

文を讀みよくするため

斯うした三つのためである事を常に念頭に置いて掛らなくてはならない。

思想を說明する事と解釋をする事とは自から別個の事だ。この一文を通して筆者はどういふ事を語らうとしてゐるか、それを或は詳細に說明し或はかいつまんで簡單にいふ。それが思想說明である。かいつまんで簡單にいふ極は、その一文に題目を與へる所まで進むべきである。

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつり行くよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

は、徒然隨筆又は閑居隨筆である。一體この文は何を書いたものか、何を述べようとして書いたものか、それが分らなくてはその文が讀めたものとは謂へないのである。

次に大切な事は文の情調を味ひ知る事である。純實用の文、科學上の文などに於ては、その思想が理解されゝばそれで足りる。藝術の文、藝術の要素を含んだ文は、それだけでは足りない。進んでその文の持つ味ひ、卽ち文の情調が分らなくてはほんとにその文が分つたとは謂へない。苟も藝術を意味する文である限り、助詞の一つにも筆者の藝術主觀が强く働いてゐる筈である。

與一鏑を取つてつがひ、よつぴいてひやうと放つ。

筆者はどうして「よつぴいて」といふ促音便をこゝに使つたか。思ふにそれは、意識的であらうと無意識的であらうと、兎にも角にも「ぐゝーッと引き絞つて」といふ强い感じを現はしたいといふ藝術主觀の自らなる現はれでなくてはならぬ。從つて之を「よく引いて」と解したのでは、ほんとは此の文を解し得たものとは謂へない。

原文の情調を端的に解釋上に再現し得る力と同時に、又之を說明し之を批評する力をも涵養しなければならぬ。「評釋せよ」といひ、「鑑賞批評せよ」といふ要求は、往々入試問題中にも見出されるのであるが、それは要するに內容と表現との關係を究めて、藝術としてのその「うまさ」を說明せよといふ事である。批評は必ずしも「うまさ」を擧げる事ではない。世の中の批評には寧ろ「まづさ」を擧げて非難攻擊する場合が少くない。けれども諸君に課せられる國文解釋の題材はうまかるべき事を豫想する。それに依つて諸君の藝術情操を涵養せしめる事を目的とする筈だか

らである。事實は往々之に反するにしても、諸君は自己の情操を豐かならしめる意味に於て、常に己を虛しうして與へられたる文材を熟讀熟考し、その中から文の「うまさ」を意識的に學び知り、味ひ知らうと努めなくてはならない。文の「うまさ」がほんとに分つて來る時、始めて再現藝術としての解釋もほんとに正しく作製し得るに至るのである。

感想はほんとに了解して之を我が身の體驗と結びつける所に生ずる。文を讀んでも何の感想も起らぬといふのは、その文の意味情調が分らぬか、又は自分の身に引較べて心底から讀まないからである。つまり魂を籠めて讀まないといふ事である。

解を書くのだ。

答案を書くのだ。

さうして諸君は折角の藝術品を醜惡無類のものにして了ふ。解や答案は分つてからの事だ。諸君は文題そのものに魂を打込んで、恍惚としてその藝術境に浸り切らなくてはいけない。「出師の表を讀んで泣かぬ者は臣子でない」と謂ふ。原文の情調のあるがまゝに、泣きもし、笑ひもし、喜びもし、悲しみもしてこそ、眞に再現藝術としての活きた解釋が得られるのである。

精讀と達讀

精讀に對蹠する者は多讀でなくて達讀である。多讀少讀は分量であり、精讀達讀は態度である。吾々は徒らに多讀する必要もなければ、むやみ少讀に制限する理由もない。自分のアタマに恰度適しただけ讀む事である。二杯の飯で恰度よい人は二杯、五杯食はねばならぬ人は五杯、そんな事はきまりきつてゐる。只必要以上に大飯を食ふと胃擴張になるやうに、むやみに澤山本を讀むと胸が擴張して馬鹿にならぬとも限らぬ。少くも科としての學問に精進しつゝある諸君は、絶對に適量以上の多讀を慎まなくてはならない。

分量の如何に拘らずどうしても缺かされぬのは精讀と達讀である。短かい一文題でもさうだ。一字一句考究檢討して見るのは精讀、さら〳〵と讀下するのは達讀、この二つを經た解がほんとの解である。

咀嚼は大切である。が、おしまひにお茶漬でさら〳〵と一杯、その妙味も亦缺かされぬ。考へて考へて考へぬいた上に、讀んで讀んで讀みぬくのである。一歩一喘のクライミング、諷爽たる坦路のハイキング、膝栗毛も大事ならドライブも亦必要だ。要するに一字一句も苟もせざる精讀と、一瀉千里その諧調に快哉を叫ぶ底の達讀と、こゝにも諸君は矛盾の眞理を見出さなくてはならぬのである。

漢文について

漢文學習の意義

中等教科としての漢文、入試科目としての漢文は、今現に中華民國や滿洲で行はれてゐるところの現代支那文ではない。昔の支那文卽ち古典としての漢文である。さうした漢文そのものと、その直譯的訓讀とは、過去日本の文化の背景であり、又文化そのものでもあつた。だから中等教科としてそれを課するのである。

抑も中等教育は現代日本の教養の中堅である。そのまゝ實社會に出ては教養ある人士として現代日本の中堅層を成すべく、進んで上級の學校に入つてはその研究する專門學術の基礎根柢を成すべき教育である。その教科は、だから單に實生活のみを對象とした純實用の教育に終始すべきでもなく、又學術としての專門境地にまで進み入るべきでもない。そこに中等教育の動かすべからざる建前が存するのである。さういふ見地から科としての漢文を見る時、それは明かに國文の一分野である。國文を古文と現代文との二つに大別する時、その古文は更に又昔の日本文と漢文とに二分されねばならぬのである。

日本の古典文學として漢文を學ぶ——それが中等教科としての漢文學習の意義であると考へる時、漢文學習の正しい態度が確立する。漢文は漢字漢語で書かれて居り、そしてその中に東洋道義の精髓の說かれてゐるものが多いから、その學習の自然の結果として、東洋道義の一斑を窺ひ知る事も出來れば、漢字漢語の正しい使ひ方に熟する事も出來る。然しそれはどこまでも正しい學習が將來する自然の結果であつて、漢文學習の意義目的ではない。

要は漢文そのものに熟し、漢文の訓讀に熟する事である。漢文そのものに熟するといふ事は、あるが儘の漢文卽ち返り點も送り假名も無い純然たる白文に於て、漢文の意味情調が分るやうになる事である。訓讀に熟するといふ事は、さうして理解し得た漢文に對して、吾等の先祖が附けたやうな返り點送り假名を附けて、昔の人が讀んだ通りに讀み得るやうになる事である。この二つの方面にほんとに習熟して、漢文を通して昔の文化に直面する事が漢文學習の眞意義である。

解釋と訓讀

解釋は漢文そのものから今の話し言葉へである。訓讀は漢文そのものから昔の樣式に依る讀み方へである。だからそれは漢文そのものを源泉とする二つの平行した流れである。

さういふ見地からいふと、漢文そのものの意味情調がほんとに分らなくては、解釋も出來なけ

れば訓讀も出來ないわけである。滿點を目標としての理想論からいへば正にその通りである。然しながら、一歩を讓つて「中らずと雖も遠からざる」答案を得ようといふ立場に立つ時、漢文の構成は概して典型的で、一つの型がきまつてゐるから、そして又訓讀の習慣がそれに準じてかなり典型的なものであるから、ほんとに原漢文の思想が分らなくても、又二つや三つの分らぬ言葉があつても、或程度の正しさに於てそれを訓讀する事が出來、又その訓讀し得た結果を口語に直解する事に依つて解釋の答案を作り得ないでもない。これは甚だ二義的なやうであるが、それは或場合の應急手段でもあり、又ほんとに一義的な成解への前提でもあり得るのである。

要するに漢文構成の原則をしつかり摑んで、その原則に基いてあるがまゝの漢文——白文を考察し、その結果を訓讀し解釋するといふ事に些のゆるぎもない。上述する事の意味は、何の考察も考慮もなしにむやみやたらと返り點を附け送り假名を附けて、それをそのまゝ不自然な講釋言葉に直すといふやうな馬鹿々々しい事では斷じて無いのである。

構文考察上の八則

漢文の構成を考究する途が八つある。細別すればもつと多くの方面になり、大別すればもつと少い方面に包括する事も出來ようが、まづ八つとして置くのが實際上利便である。

第一は語位である。語位がその常位に於て國文と違つてゐるといふ事である。

本立而道生

といふ漢文は、根本がしつかり立つて道が生ずるといふ意味で、「本」と「道」とは主語、「立」と「生」とはそれに對する述語である。だから「本立チテ道生ズ」である。「本ヲ立テテ道ヲ生ズル」と讀むのは語位の蹂躙である。論語に

君子去仁惡乎成名

といふ文句がある。これを試驗練習に出した時、大多數の諸君が「君子仁ヲ去ツテ名ヲ成スヲ惡ム」と訓じて、「君子は仁を離れて虛名を成す事を惡むものだ」と解してゐた。その訓じ方が正しいとすれば勿論その解は正しい。所がその訓じ方が間違つてゐる。從つてその解も亦原文に對して甚しく間違つてゐる事になるのである。由來主語と述語とがすぐくツついて出て來るのが漢文の原則である。假に之を主述不可分の原則と呼ばう。その原則に從つて「君子仁ヲ去ツテ名ヲ成スヲ惡ム」といふ文を考へて見ると、

君子(主)＋惡ム(述)↑仁ヲ去ツテ名ヲ成スヲ(客)

といふ關係だから、その漢文は

君子惡乎去仁成名

と書かれねばならない。所が原文は「君子」の次にすぐ「去仁」があるから「去」が「君子」の述語でなくてはならぬ。即ち「君子が仁から離れる」である。假にも仁から離れてはどうして君子といへよう。即ち「惡乎成名」は「惡カ名ヲ成サン」といふ反語で、「名」は虚名だの名譽だのの意でなくて「君子といふ名」である。

語位上殊に大切な事は助動詞の位置が全然國文と逆だといふ事である。「學ばず」は「不學」であり「學ばしむ」は「使學」である。こゝから

助動詞を保留してその掛る思想の束を考へる

といふ大きな原則が見出される。何れにしても漢文を解くには特にまづ語の位置に目を注ぐ事を忘れてはならない。

第二は用字である。漢文の用字は勿論漢字であるが、それが吾々の用字常識と甚しく異なつてゐる場合が尠くない。「鳥」は「からす」であるが、漢文では普通に「ナンゾ」といふ反語である。「女」が「をんな」でなく「ナンヂ」であつたり、「動」が「うごく」でなくて「ヤ、モスレバ」であつたり、「垂」が「たる」でなくて「ナン〳〵トス」であつたりするやうな例は枚擧に遑がない。

殊に注意すべきは漢字は品詞がきまつてゐないといふ事と、一つの文字に色々な意味があり、

一つの意味に色々の文字があるといふ事である。「雨」の字を見てすぐ「あめ」といふ名詞と考へるのは大間違である。「雨下」は「雨のやうに下る」の意であつて、この場合の「雨」は副詞、「天雨」は「天雨フル」であつて、この場合の「雨」は動詞である。「之」の一字が代名詞としては「コレヲ・コレニ・コレガ」であり、動詞としては「ユク」であり、後置詞としては「ノ」である。普通に「ナンヂ」といふ代名詞に使ふ字に「汝・女・爾・若・而・乃」等六つもあるといふやうな始末である。

斯ういふわけだから、漢文を讀む時、日常使ひ慣れてゐる漢字常識のみでこじつけようとするのは頗る危險である。平素の學習に於て殊更さういふ點に留意して、漢文の用字に習熟しなければならぬのである。

第三は對字對句である。「勤」も「勉」も「努」も「力」も、何れも「ツトム」である。それを二つ揃へて「勤勉」といひ、四つ揃へて「勤勉努力」といふ。そんな風に字を一對に揃へて使ふ事は漢文の最も顯著な辯の一つである。だから揃つてゐる文句に目を着ける事は漢文解決上の大切な鍵である。

觀其形則是叩其心則非始管鮑而終張陳

といふ文句について見よ。まづ其の字と則の字が二度繰返されてゐる事に氣着く筈である。それ

に氣着けば最初の「其」の字の上に「觀」の字が一つあるから、第二の「其」の字の上にも「叩」の字を一つ取るやうにして揃へて見ると、

一觀其形則是
一叩其心則非

といふやうにうまく揃つて「其ノ形ヲ觀レバ則チ是、其ノ心ヲ叩ケバ則チ非」と訓ずるに難はない。そこまで出來ればあとは必然的に「管鮑ニ始リテ而シテ張陳ニ終ル」となる筈。斯ういふ對句考察をやらぬ者、は往々にして「其ノ形ヲ觀レバ則チ其ノ心ヲ叩ク、則チ管鮑ニ始マルニ非ズシテ張陳ニ終ル」などととてつもない讀み方をやる事になるのである。なほ「管鮑」は管仲と鮑叔で、善友の例だといふ事は、漢文常識として心得てゐるべき事である。それが分つてゐれば「張陳」が張耳陳餘と分らぬにしても、張といひ陳といふ惡友の事とは考へられる筈。それでよい、それが漢文讀解の正道である。

第四は思想の束を考へる事である。前に助動詞を保留して思想の束を考へるというたのもそれである。

不知其能千里而食也

といふ漢文は一般に「其ノ能千里ナルヲ知ツテ食ハザルナリ」と訓じて、「其ノ能千里ナルヲ知ラ

ズシテ養フナリ」とは訓じない。それは、

不知其能千里而食也

といふやうに、「其ノ能千里ナルヲ知ツテ食フ」といふ思想の束が「不」で打消されて、それに「也」がついたものだからである。論語に

富與貴是人之所欲也不以其道得之不處也

といふ文句がある。之も同樣の意味に於て「富ト貴トハ是レ人ノ欲スル所ナリ、其ノ道ヲ以テ之ヲ得ザレバ處ラザルナリ。」と訓ずる。世には「不」以下を殊更に「其ノ道ヲ以テセザレバ之ヲ得ルモ處ラザルナリ」と訓じた書もあるが、これは明かに

不以其道得之（則）不處也

といふ構文で、「其ノ道ヲ以テ之ヲ得」といふ思想の束が「不」で打消されて、それが全體として「不處也」の條件的副詞となつたものと考へられるのである。

第五は前後の關係をよく考へる事である。文の前後をしつかり考へる事に依つて文章は正しく徹底し、分らぬ文句も分つて來るのである。日本政記に、

父子君臣夫婦、無國無之。而慈孝忠義、有別不雜、皆存於自然。

といふ文句がある。前後の關係に基づいて、

父子＝慈孝
君臣＝忠義
夫婦＝有別不雜

と考へるのは當然すぎる程當然の事と思はれるのに、

而慈孝忠義有レ別。不レ雜皆存二於自然一。

と區切つて試驗に出した學校もあれば、「慈孝と忠義とはちやんと區別があつてまぜこぜにならぬ」と解した書物もある。「夫婦別有り」は昔からのきまり文句で、只形の上から「慈孝忠義」を四字として、その四字に揃へるために「有別」の下に更に同一思想の「不雜」といふ二字を加へた迄である。だからこの一文は斷じて「父子君臣夫婦といふ人倫の關係はどんな國にでも必ずある。そして父子の道たる慈孝、君臣の道たる忠義、夫婦の道たる別ありて雜らぬといふ事は、皆自然に存するのだ」と解かれねばならない。前後を深く考へないと斯ういふ恐ろしい事にもなるのである。

第六は語句の呼應である。漢文には「何……也」「豈……乎」のやうな疑問又は反語の呼應があり、「但……耳」のやうな限定の呼應があり、「雖……而」のやうな反戻の呼應があり、「非徒……又」「不但……而又」のやうな累加の呼應があり、「況……乎」のやうな抑揚の呼應があるといふ風に、

上に或文字があると下にきまつてそれに應ずる文字の出て來る習慣がある。だから之に目を着ける事は、文の筋を正しく立てる上に頗る有利である。

第七は省略を考へる事である。前述の呼應の如きも、上だけあつて下がなかつたり、下だけあつて上がなかつたり、もつとひどい場合には上も下も省かれて而もその呼應のあるのと同じ思想を現はす場合すらある。

敢不……

は一般に「敢テ……ザラン」といふ反語として取扱はれる形であるが、これは

安敢不……乎

の習慣的省略と考へる事に依つてその意味が明瞭になるのである。「有」（アリ）や「爲」（ス・ナス・タリ）は殆ど定石的に省略され、又は名詞意識の語中に含まれて用ひられる。

與其禽獸也寧死

といふ文句は「其」の下に「爲」を意識して「其ノ禽獸タランヨリハ寧ロ死セン」と訓ずるといふやうなものである。

第八は語句の繰返に目を着ける事である。漢文の特長として、文の中心思想となるやうな字はよく繰返される。さうでない迄も、繰返された語句文字に目を着ける事は構文考察上の大きな手

懸である。前に對句の所でその實例を示したやうに、對立的に繰返された文字は概ね對句を作る基本となつてゐるのである。

以上略説した八つをしつかり應用すれば大抵の漢文の構文は誤なく解決し得るものである。勿論それだけで漢文が完全に成解されるわけではない。その外に節々になる文字もあれば特殊な故事成語の類もある。然し構文さへ過らなければ、大局に通じて「中らずと雖も遠からざる」答案は必ず作製し得られるのである。それが完全なる成解への第一歩であり、試驗の實際に當つては應急の賢策である事を忘れてはならない。

作文について

作文の根本義

作文は文を作る事だ。それに何の異論もない。だが茲で考へて見なければならぬ事は「つくる」といふ言葉の意味だ。造花をつくる、人形をつくる、家をつくる——さうした「つくる」は既成の材料を集めて或一つの形を造り上げる事である。稲をつくる、麥をつくる、豆をつくる——さうした「つくる」は自然の生命を培つて大きくさせ立派にさせる事である。前者は機械的であり後者は有機的である。

文を作るにも同様に二つの行き方がある。既成の成句成文を寄せ集めて一つの文をこしらへ上げる。それは前者の行き方である。自分の思想を自分の言葉で表現する。それは後者の行き方である。吾々の作文はどこ迄も後者の行き方でなければならぬ。

吾々は考へるが故に生きてゐる事を自覺する。だから吾々の生命とは吾々の思想の事だともいへる。醫家は心臓の活いてゐる事を以て生きてゐる證據とするであらうが、吾々は思想を失つて馬鹿になつた時、思想が狂つて氣違になつた時、もはや生きた屍である。人間としての生命は

既に失つたものだといつても敢て過言ではない。そしてその思想を表現する所の言語文字は空氣や水や日光と同じやうに、吾々の生命の糧である所の共有財産である。然しそれに或特殊の思想を盛り込んで特別の成句成文とした時、それはもう共有財産でなくてその人獨自のものである。玉川の水は萬人の汲むに任せるが、水道の管から出る水はさうは行かぬ。それと同じ理窟である。

前に造花をつくり、人形をつくり、家をつくるのを機械的だといつた。それは材料を集めて任意に作つたその形に生命の發育がないからである。とはいへ、よしやさうして作り上げられた形そのものには生命が無いにしても、その中に作者の生命が籠つたものはいくらでもあり得る。さういふ立場からいへば、さうした場合の「つくる」にも亦單なる機械的の「つくる」と或意味に於ける有機的の「つくる」とがあり得る譯である。古來藝術の巨匠が作つた工藝品にはさうした意味の幾多の逸話傳說が傳へられてゐる。左甚五郎の京人形は今も芝居の好題目として殘つてゐる。「畫龍點睛」といふ言葉もそれである。或畫家が龍を畫いて眼睛を入れずに置いた。それを難ずる者があつて畫家が一點の睛を點ずるや、龍は忽ち天上に飛び去つたといふのである。要するにそれ等は皆作家の魂の現はれとしての作品である事を物語つてゐるのである。

若し作文を以て稻を作り麥を作り豆を作るに比する事が了解し難いといふならば、之を心魂を籠めて作つた工藝品の場合に喩へてもよい。兎に角吾々の作文は他人の成句の寄せ集めであり、

乃至單なる語句文字の機械的集合であつてはならぬ。ほんとに自分の思想、自分の魂を打込んで、自分自身の生命の現はれとして語句文字を驅使したものでなくてはならぬのである。

科としての作文

作文科としての作文は、文藝の文や他の科目の答案の文とは違つた獨自の立場を持つてゐる。勿論自分自身の思想を自分自身の言語文字で表現するといふ根本に變りはないが、その上に立てられた條件に違ひがある。

文藝は魂の表現であり、美的情操の對象であるといふ以外に、殆ど何等の拘束を蒙るべからざるものである。科學の答案は事理事實の正確を條件とするものであつて、氣分情調といふ事は問題の外である。ところが作文は、樣々の條件に拘束されつゝ、而も氣分情調卽ち美的情調を對象としての魂の表現である事を期待する。この意味に於て、作文は藝術的な實用文を作る事だともいへるわけである。

科としての作文が拘束せられる條件は大體三つである。その第一は題に合つてゐる事、その第二は表現が正確な事、その第三は一定時間に一定の長さに纏つた一文を作る事である。

題に合ふ事

作文としての文は與へられた題にぴツたり合ふ事を第一條件とする。世間ではこの第一條件から既に考へ違ひをしてゐる人が尠くない。「題に合はうが合ふまいが、うまい文はうまい文、まづい文はまづい文さ」――それでよいものならてんで題などを出すには及ばぬ話だ。「寸法に合はうが合ふまいが、格好のよい靴は格好のよい靴だ」といつて、諸君は足にはまらぬ靴、だぶ〳〵でずツこ抜ける靴を買ふであらうか。

實用の價値は注文にぴツたり合つた所にある。題に合はぬ文は實用文としての意味を持つた作文に於ては無價値である。

題に合つた文を作る――それがためには先づ題の意味をしつかり考へなくてはならぬ。嘗て高校に新聞紙といふ題が出た。それを「シンブンガミ」と讀んで、「物を包むに便利だ。手習の役にも立つ。たとひ一枚の新聞紙でも無駄にしてはいけない」といつた調子で、堂々と古新聞經濟論を書き立てた人があつたといふ。

それ程極端でない迄も、題に條件があるか無いかといふやうな判斷に至つては、往々にして全く問題外にされてゐる。「家庭」「旅行」「山」「川」は「我が家庭」「旅行日記の一節」「山遊びの記」

「春の小川」とは違ふ。さういふ事が殆ど諸君から顧みられてゐないのである。

作文問題の大別

作文の問題を大別すると「一般問題」と「特殊問題」との二つになる。「家庭」「故郷」「學校」「山」「川」「秋」といふやうに、何等の條件もついてゐない問題は「一般問題」である。その物の凡てに共通な一般性質をしつかり摑んで、それを中心として書くべき問題である。「我が家庭」「我が故郷」「我が母校」「富士登山の思出」「春の小川に遊ぶ」「秋の一日」といつた風に、何等かの條件がついてゐる問題は「特殊問題」である。與へられた條件に卽してその特殊の性質を記述すべき問題である。この二つの區別は飽く迄嚴然として置くべきもの、斷じてごちや〳〵にしてならぬものである。「我が畏敬する人物」といふ題の下に、例へば日蓮上人を擇んで書くとする。その時書かれる文は單なる日蓮傳や日蓮論であつてはならぬ。この題下に取上げた日蓮は、「自分の畏敬する人物としての日蓮」であるから、文は徹頭徹尾畏敬する所以に終始しなくてはならぬのである。常にこんな考を持つて――「ぴツたり題に合はぬ文は作文としての文ではない」といふ考を常に持ち通して、問題に對して愼重に如上の考察を下して書けば、必ず科としての第一要件たる題に合つた文が出來るに相違ない。

作文の題は大別すれば如上の二つであるが、中にはその何れに解釋してもよささうな問題もなくはない。例へば「幼時の思出」「秋の夕」といふやうな題は、「わが幼時の思出」「或秋の夕の所感」といふやうに特殊扱ひにしてもよし、又、「幼時の思出は人生を淨化する」とか「秋の夕は澄みきつた閑寂だ」とかいふやうに、一般問題としての扱ひ方をしてもよいわけである。斯くて作文の問題は、

（一）絶對なる一般問題
（二）絶對なる特殊問題
（三）右二者の何れにも解釋し得る問題

といふ事になる。兎に角諸君は題そのものを愼重に考へて、誓つて題にぴツたり合つた文を作るといふ事を作文の第一要訣としなければならぬのである。

表現の正確

作文は思想を表現する事であるから、思想そのもの即ち題意に對する解釋が正確でなければならぬ事は更めていふ迄もない。思想が正確でないといふ事は直ちに題に合はぬ事を意味するからである。

いくら思想が正確で題にぴツたり合つてゐても、表現が不正確では作文としての價値は無い。表現が正しいとは、論理が正しく文字が正しく文法が正しい事である。中にも大切な事は文字文法の正しさである。論理は思想の正確に依つて救はれるが、文字や文法はさうはいかぬ。「手紙には狸、臺には鯉を載せ」では困る。「この狸一尾御目に懸け候」では悲慘な滑稽である。「餘りましよう」「教えました」でも通らなくはない。然し一切の基礎根柢としての科の文、嚴正を建前とする科の文としては、さういふ文法違ひが直ちに減點に値するのである。

文法の正確は「文法」そのものゝ正しい理解記憶に俟つ外ない。文字の正確のためには「書取」といふ勉強の仕方があつて、それが一つの試驗科目とさへなつてゐる。所が諸君は「文法」の試驗となり「書取」の試驗となると、急に正格嚴正を期してアタマをひねりながら、作文の時はもうけろ〳〵とその事を忘れて了つて、うそ字を書き文法外れの文を書く。それがいけないといふのである。

字を正しく書くための最良策は、常に字劃に留意して正しく書く癖をつける事である。目と手とによい癖をつける事である。字畫の嚴正といふ事は專門的に論じ立てると仲々容易ならぬ問題である。字の抑もの起源から論じて、歴史的にその嚴正を期しようとする學者は、現行の大多數の活字を皆うそ字だといふ。字書の說明を金科玉條として所謂俗字を排斥して「決」はいけない

「決」だ、「秘」はいけない「祕」だといふやうにやかましくいふ人もある。然し中等教科として の字は、現社會の實用を基調としての嚴正であるべきものだ。現在の社會に於て正しいものとして一般に認識使用されてゐるものを正しいとすればよいのである。「當」の字には「口」の上に「一」がなく、「富」の字は「口」の上に「一」がある。それをあべこべに書けば共にうそ字だ。さういふ意味に於ての正しさでよい。畢竟諸君は教科書其の他の書冊や新聞雜誌即ち活字として現行されてゐる文字に常住不斷の注意を拂つて、その用字習慣に正しく習熟すればよいといふ事である。

文の纏りと長さと字間

作文としての文は首尾一貫して一文に纏つたものでなくてはならぬ。漢文に常山の蛇勢といふ事がある。それは孫子の兵法に書いてある喩話である。常山に率然といふ蛇がゐる。敵が頭を擊ちに來れば尾が行つて共に防ぎ、尾を擊ちに來れば頭が行つて共に防ぎ、腹を擊ちに來れば首尾共に至つて之を防ぐといふのである。つまり各局部が孤立無援にならず、互に連絡を取つてゐるといふ事である。これがそつくりそのまゝ科としての作文のお手本である。

纏まつた文を作るについて最も大切な事は一つの中心を定める事である。例へば一般問題の文を作らうとすれば、まづ以て其の物が一般に持つてゐる性質をしつかり考へ、それから進んで其

の物のみが持つ性質といふ方へ考をちゞめて行く。汁粉は甘い、それはその物の持つ一般性質である。然しその物のみの持つ性質ではない。そこで今度は、小豆を原料とした甘い物と考へる。大分汁粉に近づいたが、それではまだ羊羹との區別がつかぬ——といつた調子で、段々と考へ詰めて行つたら、遂にはその物のみの持つ性質が考へられよう。それが只一つなら文句は無いが、多くの場合さうは行かぬ。これもその物のみの持つ性質だ、あれもその物のみの持つ性質だと色色な事がアタマに浮んで來る。それを一切合切書かうとすると纏りがつかなくなる。その中から一つの鮮かなものを擇んで、それを中心に立てて、一切の事をその中心に結び附けて書くやうにすれば必ずまとまりがつくのである。

ベースボールの中心はベースだ。だからベースから出てベースを踏んでベースへ歸つたのを一點の得點とする。さういふ考で作文をやれば必ず一つに纏つた文が得られるのである。

作文とベースボール——實によく似てゐる。或一人の選手がバツターボックスに立つてからランナーに出て、ホームインして一點を獲得する迄の過程を一つの文に喩へる時、殊更その類似が痛感されるのである。

ヒツトで出るか四球を選ぶか、何れにしてもホームベースから、一壘に進出する迄が文首である。こゝに錯誤があつては既にアウトの文だ。一壘二壘三壘、その間が文腹である。一壘から二

壘へ、二壘から三壘へと、凡て方向が變る。それが文の段落である。ぐん〳〵と眞直に進んでホームインする野球が無いやうに、一段ぶツ通して行の一つも變らぬ文などあるべきものではない。そして三壘からホームベースに突込んでいよ〳〵ホームイン、それが文尾である。本壘から出て壘々を踏んで再び本壘に還る——正に首尾一貫、立派に纏つた一文である。

一つの中心思想をしつかり掴んで各方面からそれを說く。大體文として典型的なものは五段仕立である。文首と文尾が各一段、文腹が三段である。野球を四段——四つの壘と考へるのは淺い。本壘は一にして二だ。出發ベースであり歸着ベースである。打つて出る時は一壘に向ひ、還つてはひる時は三壘から向ふ。だから結局五段である。壘のベースを踏む事が野球の必須要件であるやうに、文の各段落に必ず中心思想が出てゐて、それを中心に色々な言說——プレイが行はれる。さうすれば文は否應なしに首尾一貫したものとなるのである。

「この題ではこの事を書けばよい」と或一つの考をしつかりきめて、その一つの考を徹底させるために色々の方面から色々書き綴れば、そこに變化の統一が生じて文は面白くなる。一文を貫く一個の中心思想がないと、文は只斷篇的な事柄の羅列に過ぎなくなる。さういふ文を纏りがつかぬといふのである。纏りのつかぬ文は作文の文としては明かに落第である。いくら元氣よく走つてもオーバーランでは點にはならない。

次に考慮すべきは長さと時間の關係である。高等學校の入試では大體一高の八百字以內といふのが標準になつてゐるが、最近六百字以內と制限する學校もかなり多くなつて來た。まづ八百字乃至六百字が入試作文の長さの目安である。以內といふ以上それより一字多くてもいけない事は勿論であるが、さればといつて餘り短いのもいけない。八百字の制限に四百字では半分の長さにしか書けないといふ事を端的に表示してゐるからである。畢竟するに、

相當の時間內に
相當の長さに
一文として纏つた
題に合つた
正しい文

を要求するのが科としての作文の建前だといふ事である。そこで、長くて八百字短くて六百字程度の文を、どの位の時間に作り得ればよいかといふ事が問題になる。

それには他の答案との振合も考へて見なければならぬ。出題方針は必ずしも一定してはゐないが、現在の入試の大勢から綜合して考へて見るに、

國語二問計五十點

漢文二問計五十點
書取文法各一問計五十點
作文一問計五十點

總計七問二百點を三時間でやらせるのが入試の標準と認めてよいと思ふ。三時間百八十分、それが五十點づゝ四つに分けられるとすれば、作文五十點のために四十五分掛けるのが最も公平なわけであるが、實際にはさうきちんと行くものではない。そこで全體の百八十分の内から二十分を豫備として差引く。それが全體の問題に目を通して答案を書く順序をきめたり、跡から一通り答案に目を通したりする時間である。さて殘り百六十分の内で百二十分を國文漢文書取文法をやる正味の時間とすると、作文を書く正味の時間は四十分といふ事になる。その邊が最も妥當であると思ふ。

作文の四十分は最後に取つて置いて、百二十分を國文漢文書取文法に掛けて了つたら、「もう少し」「もう一息」などゝ未練がましい事を言はずに、直ちに作文に掛るがよい。二點や三點の未練のために作文の五十點に大きな傷をつけるのは愚の骨頂である。

作文の練習

諸君は四十分を目標として、最初まづ一時間位から始めて、段々時間をつゞめ、四十分でちやんと一文を作り上げる練習を積むがよい。解釋は人の作つた文を解くのだから分らなければ何ともしやうがない。だから點數の確實性が少いとも謂へる。作文は自分で文を作る事だ。だから態度さへ間違へねば必ず點が取れる。而もその點は大抵の場合二百點中の五十點、實に四分の一といふ纏つた大きな點數である。假に今迄の作文力が二十點である者が、練習に依つて二十五點になり、二十五點が三十點になれるとしたら、こんなうまい事は無いではないか。

作文の學習は必ずしもむやみに文を作る事ではない。野球に於ても投げる取る打つ走るの基本練習が大切であるやうに、一寸ハガキ一枚書くにもそれを作文の基本と考へて、短いは短いなりに正しく纏めて書くといふやうに心懸けるがよい。そして一學期二學期の中は月に一題位ほんとに作文をやつて見る。三學期の戰前には一週一題位の猛練習が甚だ效果的である。猛練習は暴練習ではない。ほんとに眞劍に、ほんとに嚴格に、魂を傾注して作る事である。駄作濫作をやると却てマイナスの方向に進んで了ふであらう。

作文の練習に必要な事は時と所とを選ばぬ事である。「今日は氣分が落着かぬから明日にしよう」といふやうな事ではいけない。同時に題のより好みもいけない。作文をやるときめた時間が來たら、誰かから題を出して貰つて、直ちに作文に掛つて、四十分なら四十分できちんと纏めて

了ふといふやうな練習でなくては實戰の役には立たない。

作文に使ふ假名

假名は片假名がよいか平假名がよいかといふ事も諸君の心を惱ます一つの事であるらしい。一體片假名は漢字の楷書を略したものだから感じがきちんとしてゐて堅い。平假名は漢字の草書を略したものだから感じが軟かいだけに字體が崩れ易い。字體が崩れゝば感じがきたなくなる。そこで作文に於ては軟かで而もきれいな感じを採點者に與へる意味で、漢字の楷書の間に字體を崩さぬ平假名をまぜて書くがよいといふ事になる。尤も片假名に限ると制限されゝば勿論問題は別だ。解釋の答案は嚴正が一番の生命だから寧ろ片假名の方がよいと思ふが、これも再現藝術といふ建前からいへばやはり字體を崩さぬ平假名がいゝとも謂へよう。只吳々も留意すべき事は、平假名を使つたがために漢字までも崩して書くやうになつて、全體がきちんとした見易いものでなくなつてはならぬといふ事である。

藝術的とは何か

作文の文は藝術的實用文だといつた。藝術的とは氣分のよいやうにといふ事であり、實用的と

は目的にぴツたり合ふやうにといふ事である。卽ち與へられた題目や條件にぴツたり合つてゐて、而も書く人と讀む人との間に美しい氣分のコーラスが流れるやうな文を作れといふ事である。

吾々の生活から藝術的の要素を拔いたら、それはどんなに乾燥無味なものであらう。こんな話がある。或外人が始めて横濱に上陸した。そして日本特有の珍しいものを食ひたいといひ出した。求められた案內者はおすしを提供した。外人は大喜びでそれを食つた。蓋し外人としては珍しい食通である。外人もさしみが食へるやうになれば一角の日本通だとさへ謂はれる位だのに、この外人は上陸第一歩でおすしを賞美した程の食通である。

そこ迄は實にいゝが、それから先がいけない。彼はおすしに附いてゐた笹をキャベヂと間違へて食つてしまつた。笹が喉に引掛つて茶色の目は忽ち白黑と變化した。彼は憤然色をなして「食へぬ物を食膳に載せる日本の習慣」を「殺人習慣」として國際裁判に訴へるといきまいた。吾等の生活に藝術的要素が多分に含まれてゐる事を味ひ知らぬ悲哀である。

事柄が事柄として正しく記述されてゐる事の必要は更めていふ迄もないが、それだけでは作文の文も他の答案の文も變りはないといふ事になる。食ふためのおすしに色彩の取合せがあり、おまけに笹までついて感じのよいものになつてゐる事を考へたら、作文のほんとの意味が分るであらう。藝術的といふ事を、只きれいに飾りたてる事と誤解しては困る。藝術的といふのは心の感

じが正しくにじみ出る事であつて、腹にも無い言葉を飾り立てる事ではない。上手にうそをつくのが作文だなどと誤解されては大變である。

厨川白村がいつてゐるやうに、凡そ世の中の眞には二色ある。科學的眞と藝術的眞とがそれだ。白髪三千丈は藝術的の眞で、白髪何十何センチは科學的眞である。すゝきの風にそよぐのをお化とするのは藝術的眞で、考査檢討してすゝきをすゝきと認識判斷するのは科學的眞である。一切の科學は科學的眞の上に立ち、一切の藝術は藝術的眞の上に立つ。そして吾々の作文はその兩面に立脚地を持つて、それを正しく融合させようとする所にその至難さがあるのである。

事實の眞と感じの眞とをぴツたり融合させて、與へられた條件にぴツたり合つた纏りのある正しい一文を、比較的短時間の內に作る事は、決してたやすい仕事ではない。諸君には、だから眞劍に作文を練習するの必要がひし〳〵と迫つてゐるのである。

自分を語る

生ひ立ち

私は明治十四年の十二月に靜岡縣小笠郡堀內といふ驛から約一里半離れた一村落の農家に生れた。姓は岩澤、名は和作であつた。が、當時父の浪費生活が禍して家政は頗る逼迫してゐたし、母は產後の肥立ちが惡くて間もなく死んで了ふといふやうな譯で、當時その村の一小寺の住持であつた塚本哲英といふ坊さんに貰はれて、遂に塚本の姓を冒すに至り、その後養父の轉住に伴つて居を磐田郡西貝村に移し、そこで人と成つた。哲三の名はずつと後に坊さんになる事を條件として改名したものである。だから當り前なら哲三和尙である筈の私であるが、その方は後に同じく哲英和尙の養子となつた義兄哲俊君に繼いで戴いて、私は凡俗の生活に終始した次第である。

小學生時代

當事の制度に於ける尋常科の四年間は何事もなく凡常に過ぎた。然し貰はれッ子である事を知覺してからの私は割合に神經質な、かよわい、そしてひねッこびた子供であつたやうに記憶する。

引續き高等小學に這入つてから特に有難い先生として今も私の尊崇の的となつてゐるのは校長の大木文藏先生であつた。謹直にして而も洒々落々たる人格者大木先生は、今なほ矍鑠として靜岡精華高等女學校に教鞭を執つて居られる。校長先生ではあつたが、特に私に深い感化を與へて下さつたのは、四年生時代の作文の御授業であつた。上述したやうな私の作文觀も、その御授業が搖籃をなしたものと思ふ。

今一人忘れる事の出來ないのは大杉初太郎先生である。先生からは中學への編入試驗を受けるために、餘暇に數學と英語とを教へて戴いたのであるが、その篤切眞摯で而も洒脫な人格は大木先生と共に常に私の敬慕して措かざる所である。先生は今鄕黨に於て靜かに風月を樂んで居られる。

中學生時代

高等科の四年を卒へて濱松中學——今の濱松一中の二年生に編入試驗を受けて、數十人中の四人として合格入學した。たしかに大杉先生の御蔭である。

中學時代には澤山の記憶すべき先生がある。中にも英語の伊藤太郎先生からは殆ど肉親も及ばぬ程の御親切を受けた。中學生活は私に取つて實に籠の鳥が放たれたやうな朗かさであつた。然し割合に健康に惠まれず、一學期の試驗は遂に一度も受けられなかつたといふやうな事情の上に、

家庭的の惱みに基く捨鉢氣分が伴つたりして、私は四年から五年への進級が出來ず、結局三年修了を一生の學歷の全部として退學して了つた。

小學教員時代

中學を退つて間もなく出身高等小學の先生となつて、大木校長や大杉先生を先輩として親しく相語る事の出來るやうな境遇となつた。十八九の若さで四年の女生徒——十四五歲の娘の國語を受持つたのだから、多少ローマンスじみた思出がないでもない。それは兎に角として、子供の時分から割合にすきで多少成績も良かつた國語と英語に進まうと思ひ立つたのは、その時からである。その學校の英語には鈴木嘉昭君が居てよく指導して吳れた。君とは其の後も特に長く親交を續けたが、君は沼津中學の教頭を最後として遂に不歸の客となつて了つた。

二十一の年、徵兵檢査が丙種といふなさけなさで相濟んで、その冬十二月、姉の家を賴つて上京した。帝國教育會の國漢文中等教員講習會に入會する目的で上京したのであるが、その講義はほんの一ヶ月位聽いただけで止めて了つた。讀む事がすきで喋べる事がすきで、默つて聽いてゐる事の出來ぬ私の我儘な性分からである。翌年から堀江嘉吉先生の下に神田和泉小學校で教鞭を執る事となり、翌々年の秋には京橋の文海小學校に轉じた。が、二十二と二十三へ掛けては腸チ

プスをやつたり肺尖加答兒をやつたりした。おまけに二十三に文海小學校へ轉じて間もなく姉が病死するといふやうな事があつて、精神的にもかなり強い痛手を受けたものである。かくして私は在米の兄――その兄も今はもう亡き數に入つたが、その兄の聟入り先であつた靜岡の森下家に靜養する身となつた。

靜養半年弱で靜岡縣燒津驛近くの東益津小學校に奉職した。すみれたんぽゝのきれいに咲き續いた田中の道を、車に搖られて藤枝の郡役所まで辭令を貰ひに行つたその時の嬉しさは、今も忘れる事の出來ぬ美しい思出である。その時以來すみれとたんぽゝは殊更私のすきなものになつて了つた。然しそこでも極めて凡常の一年と一學期を暮して二十五の秋再び上京した。その夏文部省の國漢檢定試驗を受けて豫備試驗は通過してゐた。上京の目的は英語を勉强する事であつた。そして麻布の南山小學校の英語の專科教員として働く傍國民英學會に通つてゐた。が、その十二月に伊藤先生の御紹介で埼玉縣熊谷中學の助教諭心得に補せられる事になつた。それも初年級の英語を受持つといふわけで、今考へても腋の下に冷汗の出る思がする。

中學教員時代

それにしても先生として始めて熊谷中學の門をくゞつた時は、實際得意の絶頂だつた。二十五の

十二月に赴任して二十六の二月には文檢の國漢がやつと合格した。從つて四月からは本格の教諭に任ぜられた。そしてその四月に結婚してさゝやかな家庭を作るに至つた。長男初の生れたのはその翌年の四月であるが、私はその生れる前に山口縣岩國中學に轉任してゐた。二十六七の中學校の先生は今日ではごく普通だが、その頃では割合若い方であつた。おまけに私は馬鹿々々しく小僧ツ子に見えたものである。痩ツぽちで筒袖の綿服といふ有樣だつたから無理もない。熊谷中學で日曜に當直をやつてゐると、父兄の一人が何だかひどく興奮してやつて來て、いきなり私をつかまへて「おい當直の先生はどこにゐる」と呶鳴つたものだ。岩國中學では新任の書記さんに生徒と間違へられて面喰ひ、その後宴會の席などでよくその書記さんをからかつたものである。共にほゝゑましい思ひ出だ。

岩國中學の校長は濱中時代の校長杉田平四郎先生で、多少同僚の先生方から誤解を受けたかと思ふ位に信任されたものである。その現はれの一つは、全然私の考に一任しての新寄宿舍の創設的經營であつた。だが當時の私はその知遇に報いてゆつくり寄宿舍の創設を進めて行くには野心と懊惱とが多過ぎた。斯くして遂に杉田校長に負いて二十八の秋東京の立教中學に轉じて了つた。その直接の動機は、當時三中の先生であつた伊藤先生が早大の勝俣教授と提携して有朋堂から刊行すべく計畫されてゐた英語辭書のお手傳をする事であつた。

立教へ來てからの私は色々な先生の御親交を受けた。中にも本莊季彦先生や古賀友太先生などはその最なるものであるが、殊更深く相結んで今日に及んでゐるのは考へ方の藤森良藏先生である。

有朋堂との關係もそれ以來段々深くなつて、そのまゝ今日に及んでゐる。特に深く有朋堂の前店主故三浦理君と私とを結びつけたものは藤井乙男博士の『諺語大辭典』の索引である。それは明治四十二年私が二十九の年の年末であつた。私の愚案になる索引の稿が幸に藤井博士の滿足する所となつたからである。

斯くして四十三年三十歳の時に國語と漢文との入試問題解釋を有朋堂から出す事になつた。これが私の貧しい著作生活の第一歩である。

其の後の私

明治四十二年の冬に南日恒太郎先生の熟語大辭典の業を了へた當時の有朋堂編輯長永井太三郎君が米國に遊ばれて、その後を早大教授菅野德助君が引受け、『思想大辭典』と『有朋堂文庫』とを計畫された。菅野君が總指揮官で、思想主任が服部嘉香君、私が文庫主任といふ事になつた。この頃から私は全く英語を斷念して國漢の研究に專念するやうになつて了つた。その後菅野君は、

雄圖空しく、そしてあの『悲劇オセロ』に見るやうな犀利深遠な英文の學識を多く世に發表する暇もなく病魔に犯され、遂に永眠される事になつて、ずる〳〵と私が有朋堂の總顧問といふやうな事になり、遂に立教をも辭して、專心『有朋堂文庫』その他の經營に當る事となつた。

斯うして私が有朋堂と深く相結んでゐる間に、藤森君の考へ方宣傳の事業も段々大掛りになつて、私はその方をもかなり立入つてお手傳する事になり、そのまゝ今日に及んでゐる。尤も考へ方の方では、この頃は私の助手であつた丸野彌高君が十分の研究と經驗とを經て表面に立たれるやうになつてゐる。

私の念願

これからの私も、蓋し有朋堂と考へ方とを二つの立場として受驗教育のために精進して行けるものと思ふ。他に今一つの念願として、どうか和漢の古典文學を正しく大衆に紹介したいと思つてゐる。受驗教育といふやうな條件なしに、もつと自由な廣い立場に於て古典文學の紹介に精進したいといふ事である。

私には特別の趣味といふやうなものは無い。かなり呑氣な性分で、芝居でも映画でも野球でもラグビーでも、その外どんな事でも、人のしてゐるのを見て樂む事は誠にすきだが、自分自身に

は何一つも出來ない。又やつて見ようといふ氣も起らぬ。只自分は自分の力の及ぶ限り、正しく聖戰闘士を指導し、正しく古典文學を世の中に紹介する事に、殘り少ない一生を捧げ盡したいと念ずるのみである。

聖戰閑話 終

▲聖戰閑話▼
非賣品

昭和十三年四月　日印刷
昭和昭十三年四月　日發行

著作者　東京市淀橋區西大久保二丁目二三六番地　塚本哲三

發行者　東京市神田區錦町一丁目七番地　株式會社有朋堂　代表者　三浦正

印刷者　東京市神田區錦町三丁目二二番地　佐久間修三

發行所　東京市神田區錦町一丁目　振替口座東京七一四八　株式會社有朋堂

行印社刷印朋有社會資合

塚本哲三先生述作一覽

更訂國文解釋法	解釋法型布製 定價一、八〇 送料八七〇 二四頁	
更訂漢文解釋法	解釋法型布製 定價一、八〇 送料七六〇 二四頁	
更訂現代文解釋法	解釋法型布製 定價一、八〇 送料七八〇 二四頁	
精說國文法	解釋法型布製 定價一、八〇 送料六〇 二四頁	
通解徒然草	解釋法型布製 定價一、八〇 送料五七 二四頁	
通解方丈記	解釋法型布製 定價一、〇〇 送料二五 九頁	
通解十六夜日記	解釋法型布製 定價一、〇〇 送料一七 九頁	
通解增鏡要抄	解釋法型布製 定價一、五〇 送料五八〇 一〇頁	
徒然草解釋	菊判布製 定價四、〇〇 送料六七 二二頁	
縮版徒然草解釋	四六判布製 定價二、五〇 送料六七 二四頁	

東京番 八重洲口 一座 振替 七四一〇

株式會社 有朋堂

東京市神田區 一ツ橋 丁目 町 館

▽內容見本附圖書目錄御申込次第進呈△

終